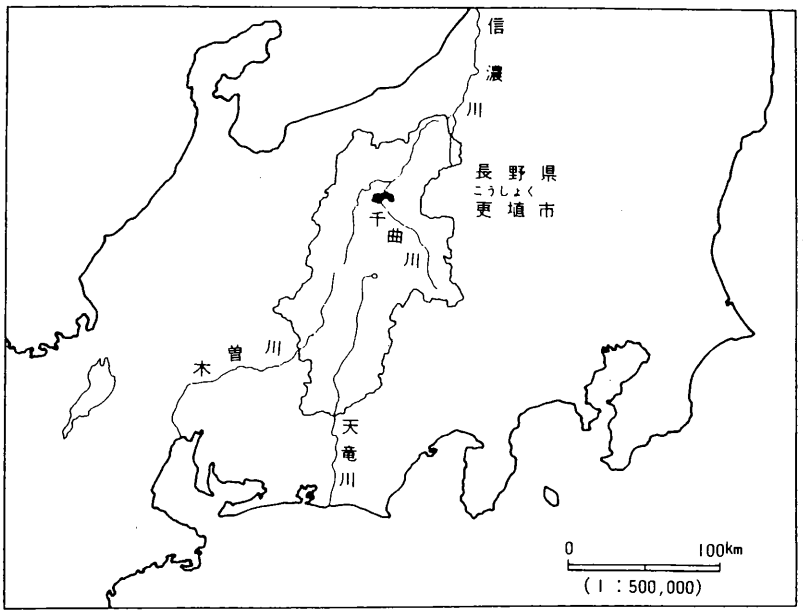
荒井遺跡III
宮裏遺跡

1995

更埴市教育委員会

信州大学附属図書館教育学部分館



例　言

1、本書は、平成6年度に更埴市教育委員会が実施した「荒井遺跡」と「宮裏遺跡」の発掘調査報告書である。

2、本書の編集者及び執筆は、調査担当者が行った。

3、現場における実測図は担当者が作成し、遺物の実測図は担当者と調査員が行った。

4、本文中の方位は真北を表しており、調査基準点は測量業者に委託し、平面直角座標系第Ⅷ系の座標値を求めた。

5、本調査に伴う、出土遺物・実測図・写真等の資料は、更埴市教育委員会に保管されている。

なお、荒井遺跡に関係する資料には、荒井遺跡3次調査を略して『ＡＲＩ３』、宮裏遺跡に関係する資料には、平成5年度分については『ＭＹＵ』、平成6年度分については『ＭＹＵ２』と記入されている。

目　次

例　言・目　次
1　荒井遺跡
第1章　調査の概要……1
第1節　概　要……1
第2節　調査の経過……1
第3節　調査日誌……2
第2章　遺跡の環境……2
第3章　遺構と遺物……5
第1節　古墳時代……5
第2節　奈良時代以降……7
第4章　まとめ……11

2　宮裏遺跡
第1章　調査の概要……15
第1節　概　要……15
第2節　調査の経過……16
第3節　調査日誌……16
第2章　遺跡の環境……17
第3章　遺構と遺物……21
第1節　平安時代……21
第2節　中　世……22
第4章　まとめ……32

1　荒井遺跡Ⅲ

第1章　調査の概要

第1節　概　要

1　調査遺跡名　屋代(やしろ)遺跡群　荒井(あらい)遺跡　　(市台帳No.31－5)

2　所在地及び　更埴市大字屋代字荒井1152

　土地所有者　更埴市大字杭瀬下84　更埴市土地開発公社

3　原因及び　アメニティータウン屋代団地建設

　事業者　更埴市土地開発公社

4　調査内容　発掘調査　　調査面積　約200m²

5　調査期間　平成6年5月11日～平成6年6月3日

6　調査費用　1,550,000 円

7　調査主体者　更埴市教育委員会

　担当者　佐藤信之　　更埴市教育委員会

　調査員　小野紀男　　更埴市教育委員会

　調査参加者　猿渡久人　大井操子　金井順子　久保啓子　小林千春　小林昌子　小林芳白

　　高野貞子　富沢豊延　中村久美子　中村文恵　宮崎恵子　村山　豊

　事務局　山崎芳之　下崎雅信　矢島宏雄　佐藤信之　小野紀男

　種別・時期　集落跡　　奈良・平安時代

　　墓　　古墳時代

　遺構・遺物　古墳時代　　方形周溝墓　1基　　土器棺　2基

　　奈良～平安時代　　竪穴住居　7棟　　溝　　8基

　　出土遺物　　コンテナ8箱

第2節　調査の経過

平成5年11月、更埴市土地開発公社から、当該地で宅地造成を計画しているとの連絡があった。市教育委員会では、昭和62年に実施した詳細分布調査の際、埋蔵文化財が確認されている地点であることから、発掘調査が必要であると伝えた。12月15日、試掘調査を実施した結果、地表下約120cmに埋蔵文化財の存在が確認された。土地開発公社では、調査結果に基づき掘削部分を減らすよう設計変更を行ったが、道路部分については掘削を伴うため、発掘調査を実施することにし、調査の準備を開始した。

平成6年度に入り、文化財保護法による57条の提出があり、5月2日、更埴市土地開発公社と更埴市の間に委託契約が締結され、5月11日から発掘調査に入り、6月3日、無事現場調査を完了した。

第３節　調査日誌

平成６年５月12日　発掘調査機材搬入し、明日からの調査準備を行う。

13日　作業員、重機入り掘り下げ開始。

16日　上部砂層除去完了、畝状の遺構検出。実測後下層の掘り下げに入る。

18日　調査区中央付近から最初の住居跡検出。

23日　方形周溝墓と思われる溝、土器棺検出。

24日　溝の掘り下げに入る。

６月１日　下層部の掘り下げほぼ完了、全体写真撮影。

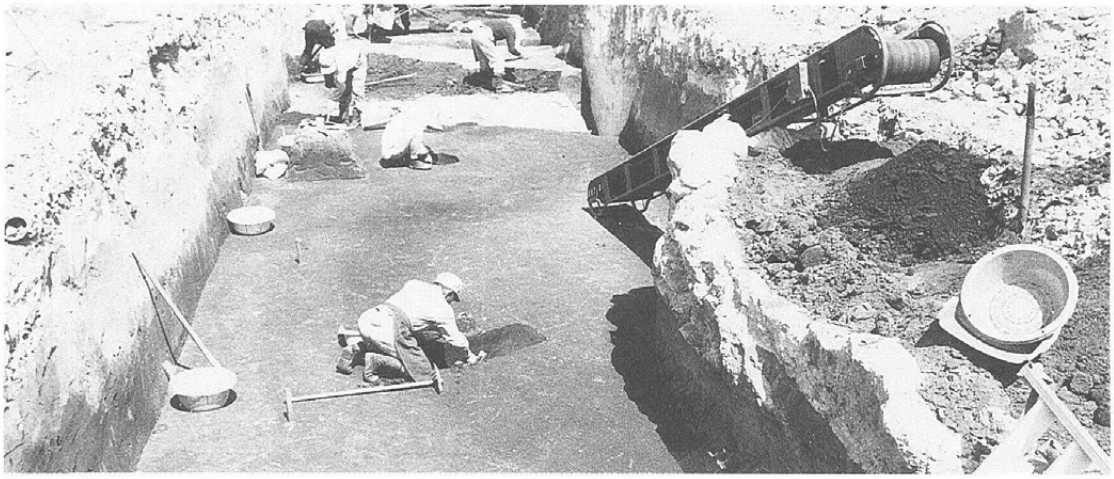
３日　現場における作業終了し、機材を撤収する。

第２章　遺跡の環境

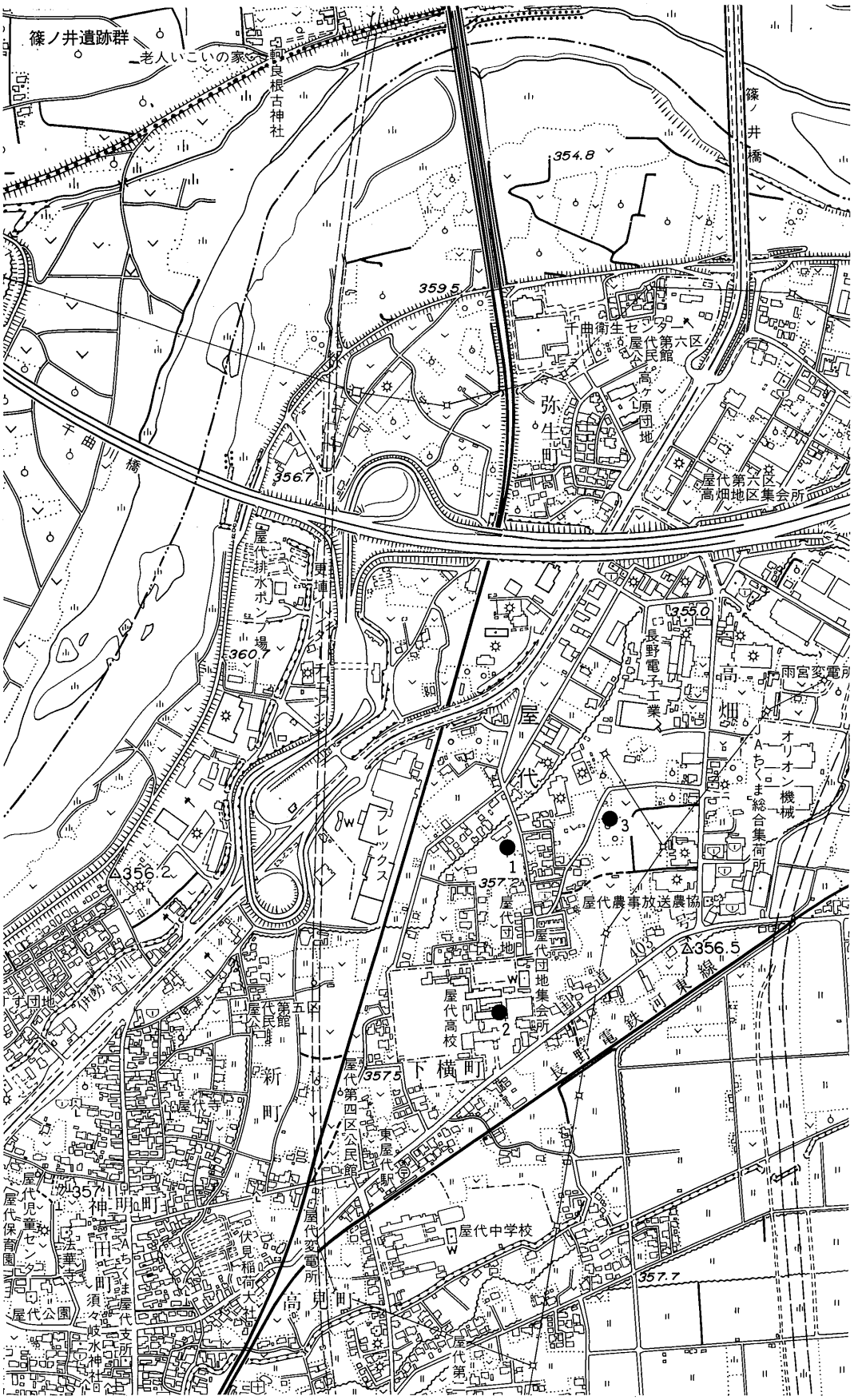
荒井遺跡は更埴市大字屋代字荒井に位置し、大きく屋代遺跡群として包括されている。遺跡群は千曲川によって形成された自然堤防上に位置しており、標高355m前後で東西2.5km、南北１km程の広がりを持っている。また遺跡群の西側は粟佐遺跡群へと続いており、東西３kmにわたって展開する大遺跡群となる。荒井遺跡は遺跡群内の北側に位置し、自然堤防縁辺部に当たるため大きく北側が落ち込んでいる。

荒井遺跡に隣接する遺跡に城ノ内遺跡・馬口遺跡などがある。いずれも古くから遺跡の存在が知られていた遺跡で多くの調査が行われている。城ノ内遺跡は昭和32年から35年に善光寺平初の学術調査が行われたのを初め、８回の調査が行われており、古墳時代を中心とする弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが理解されている。また、馬口遺跡は、昭和８年プール建設に際して、多量の遺物出土しており、昭和45年には屋代高等学校の地歴班によって、校庭部分の調査が行われた。その後、屋代高等学校校舎改築にともない、昭和53年から平成2年に7回の調査が行われ、平安時代の集落跡と条里水田跡が検出されている。

荒井遺跡でも平成元年から２回の調査が行われており、弥生時代から中世の遺構が検出されている。特に中世居館跡の方形区画溝は城ノ内遺跡との関係で注目されている。

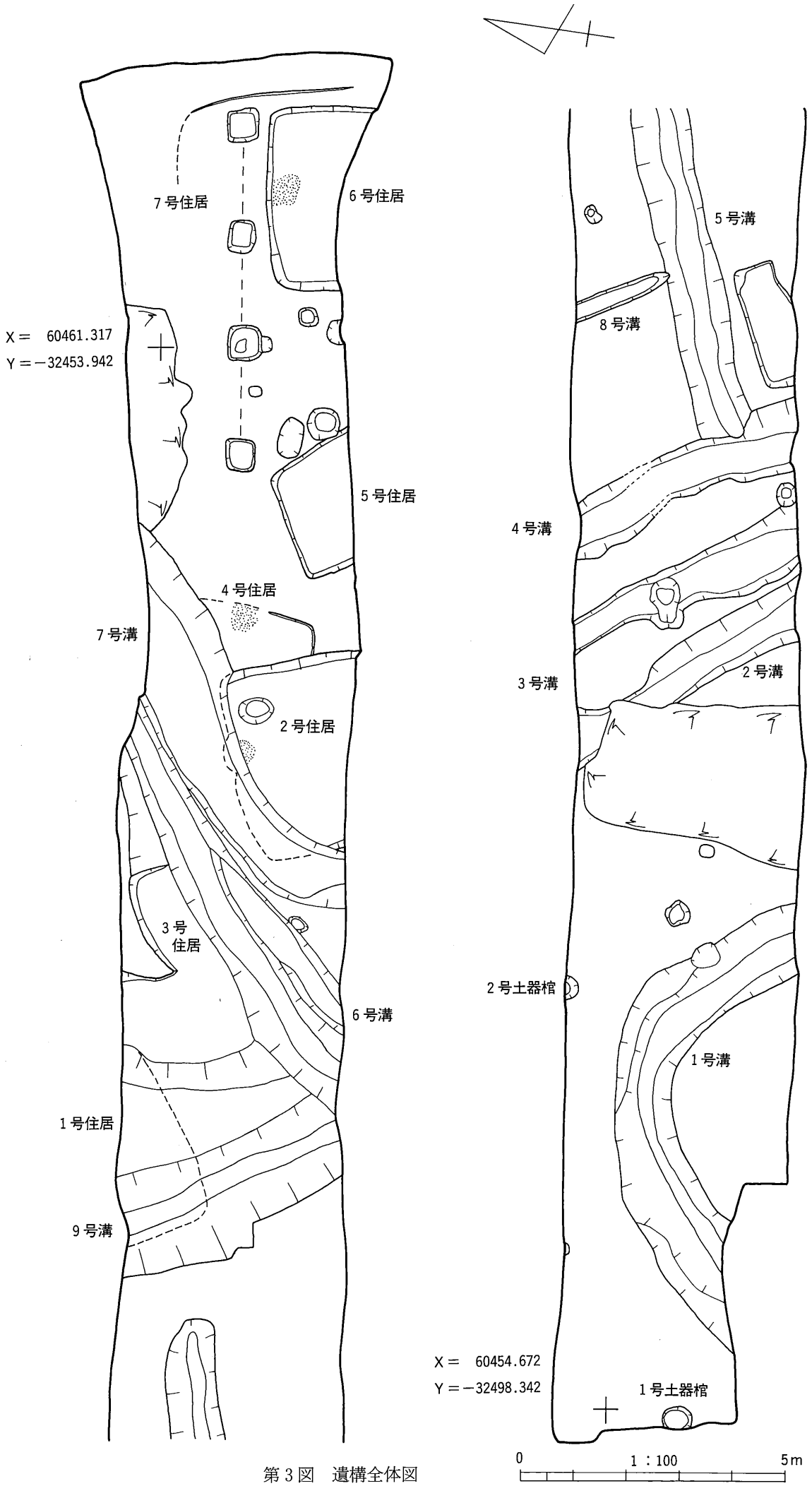


第１図　調査風景



1 荒井遺跡　2 馬口遺跡　3 松ヶ崎遺跡

第2図　遺跡位置図　（1：10,000）


7号住居
6号住居
X＝　60461.317
Y＝－32453.942
5号住居
4号住居
7号溝
2号住居
3号
住居
6号溝
1号住居
9号溝
5号溝
8号溝
4号溝
3号溝
2号溝
2号土器棺
1号溝
X＝　60454.672
Y＝－32498.342
1号土器棺
0
1：100
5m

第3図　遺構全体図

第３章　遺構と遺物

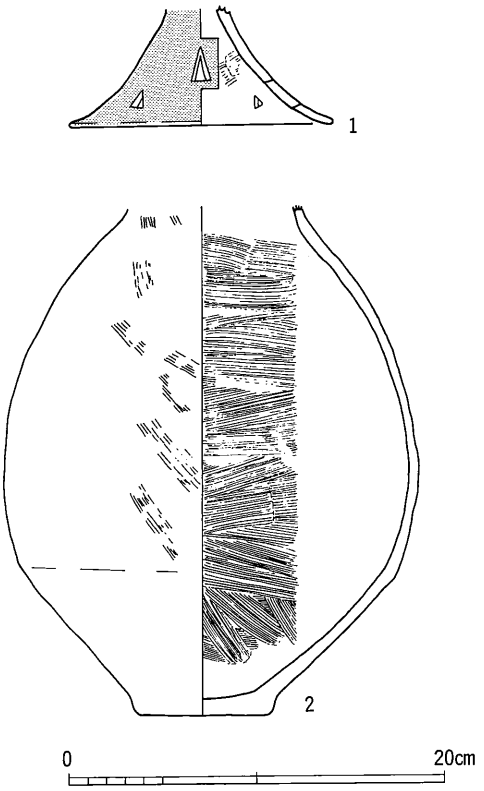
第1節　古墳時代

住居跡の検出はなかったが、方形周溝墓と思われる溝の一部と、土器棺２基が検出されている。

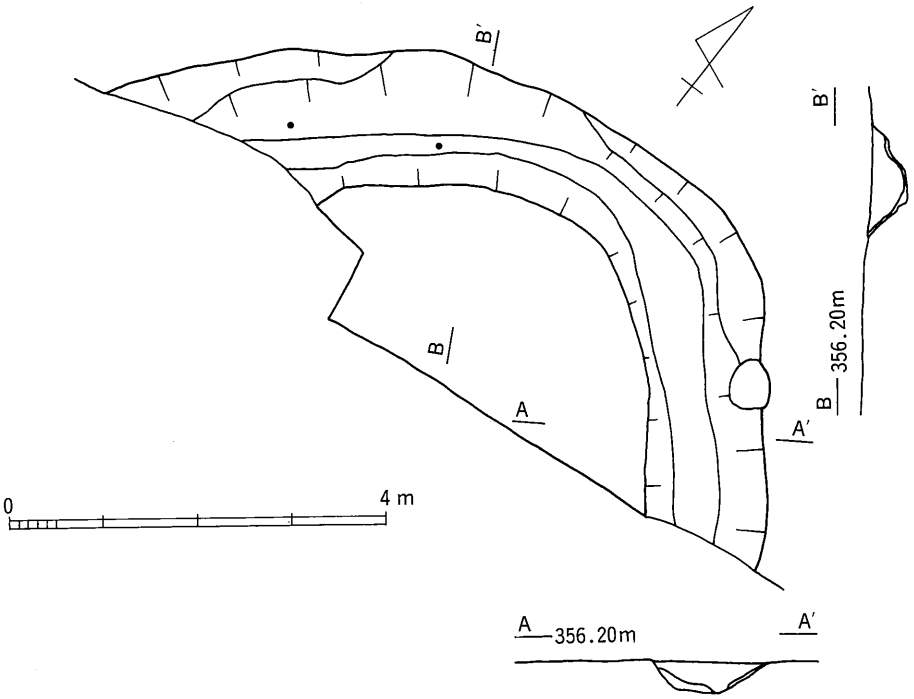
１号溝

構造：遺構の南側半分以上が調査区外となるため、詳細は明らかでないが内寸で１辺６ｍ前後の方形周溝墓が想定できる。幅1.1～1.7ｍの溝で、深さは40cm程を測れる。周溝内側の盛土の存在を確認したが検出できなかった。

遺物：出土遺物は図示した２点の他にはほとんどなく、いずれも周溝内の上層から出土している。１は、ハの字状に開く高杯の脚部で、赤色塗彩されており、三角形の透かしが２段に穿たれている。２は胴部下半に屈曲部を持ち、箱清水式土器の影響を感じさせる土器であるが、赤色塗彩はなく残存部には頸部文様帯もない。



第４図　１号溝出土遺物

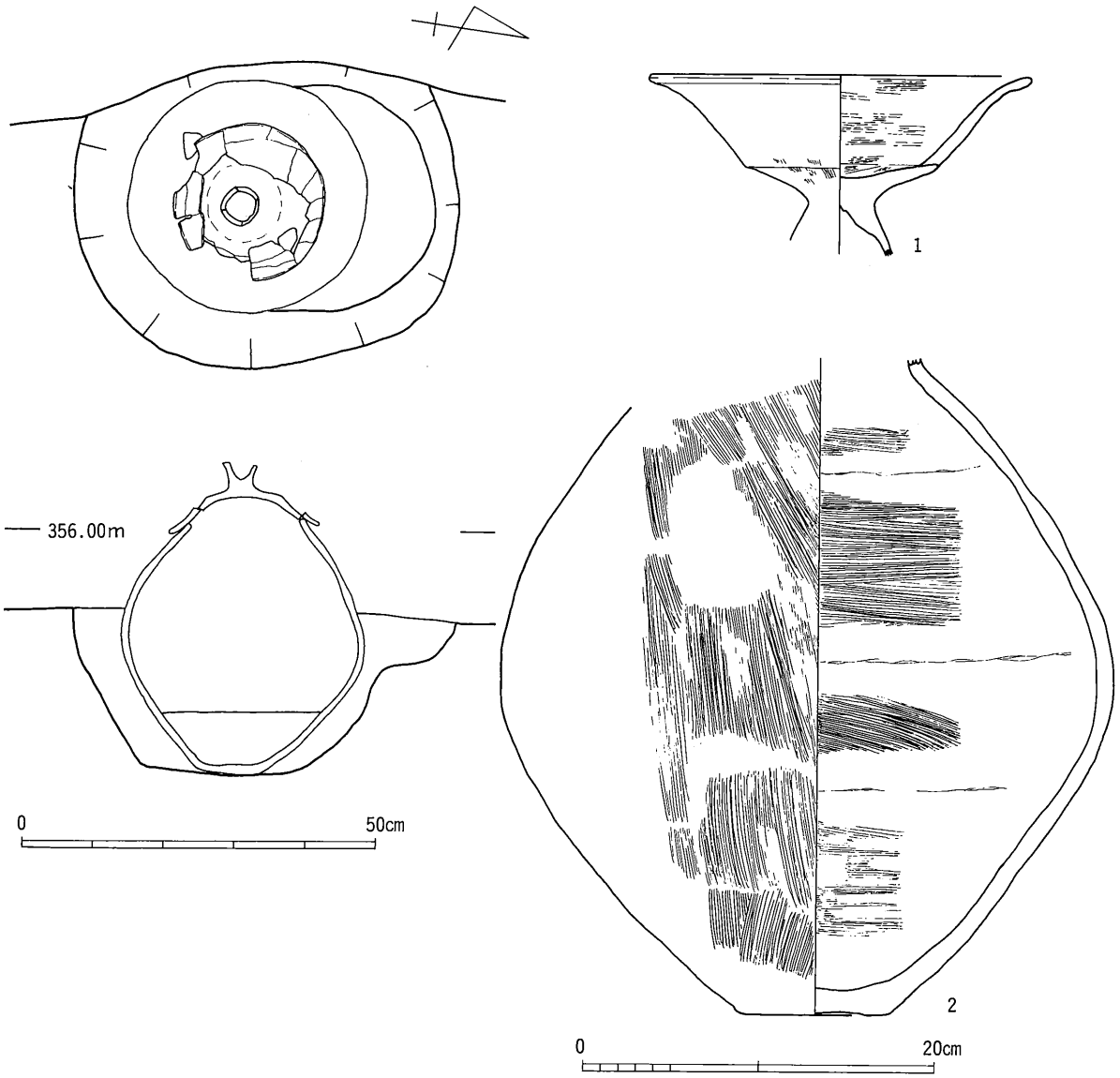


第５図　１号溝

1号土器棺

構造：調査区西端から検出された遺構である。長径約55cmの楕円形の掘形内に、口縁部を欠いた壺を正位に立て、脚部を欠いた高杯を伏せて蓋としている。内部は空洞となっており、底部には厚さ10cm程に骨片が堆積していた。骨片は鑑定を行っていないが、大型の骨の破片が見当たらないことから、人骨であるとすれば、幼児骨の可能性が高い。

遺物：棺に用いられた壺・高杯と内部の骨片内から出土した滑石製の臼玉がある。高杯は口径21.5cmと大型であるが、器面にミガキを行っておらず、荒い作りとなっている。壺は胴中央部に最大径を持ちハケの後荒いナデを施している。臼玉はそろばん玉型である。



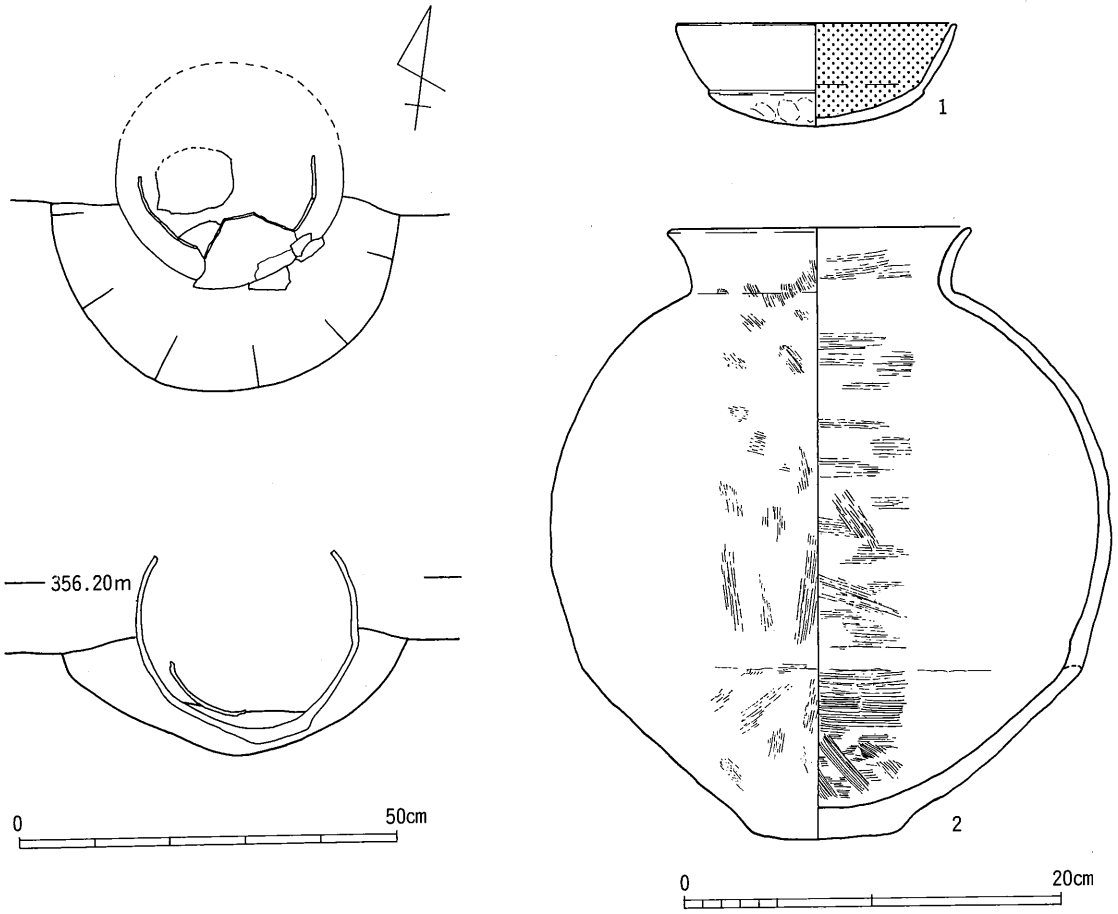
第6図　1号土器棺及び出土遺物

2号土器棺

構造：1号溝の北側から検出された遺構で北側は調査区外にある。1号土器棺同様、掘形内に壺を正位に立て、杯を伏せて蓋としていたものと思われるが、壺内に落ち込んでいた。壺は口縁部の半分程

を欠くが、完形で使用されたものと思われる。内部は土が入り込んでおり、骨などの検出はなかった。

遺物：棺に用いられた杯と壺以外に出土遺物はなかった。杯は体部下半に稜を持つもので、内面は黒色処理が施されている。壺は球形胴であるが胴部下半に屈曲部があり、口縁部は僅かに開いて短く立ち上がる。器面はハケの後荒いミガキで整えている。



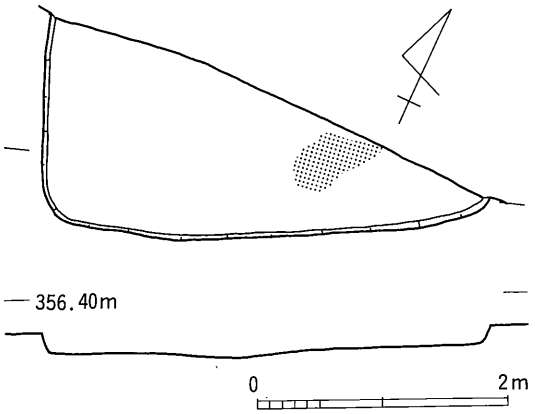
第７図　２号土器棺及び出土遺物

第２節　奈良時代以降

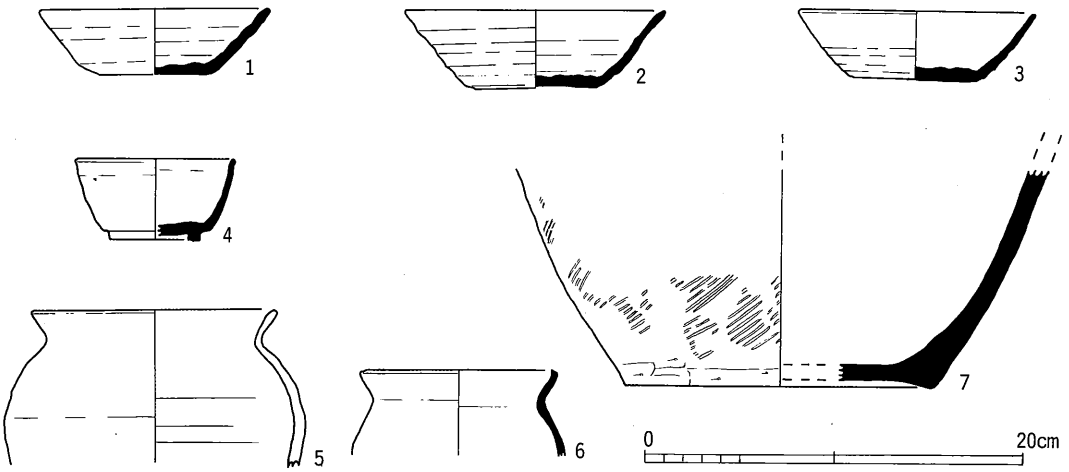
調査区の東側に住居跡が集中しており、城ノ内遺跡から続く集落跡の西限に当たると考えられる。１号溝を除き、溝も当該期と思われる。

１号住居跡

構造：調査区中央付近から検出された遺構で、北側は調査区外となる。一辺3.6m前後の住居跡で、カマドは床面の焼土から東壁にあると思われ、主軸方向はＮ－60°－Ｅと考えられる。検出できた壁高は15cm程



第８図　１号住居跡



第９図　１号住居跡出土遺物

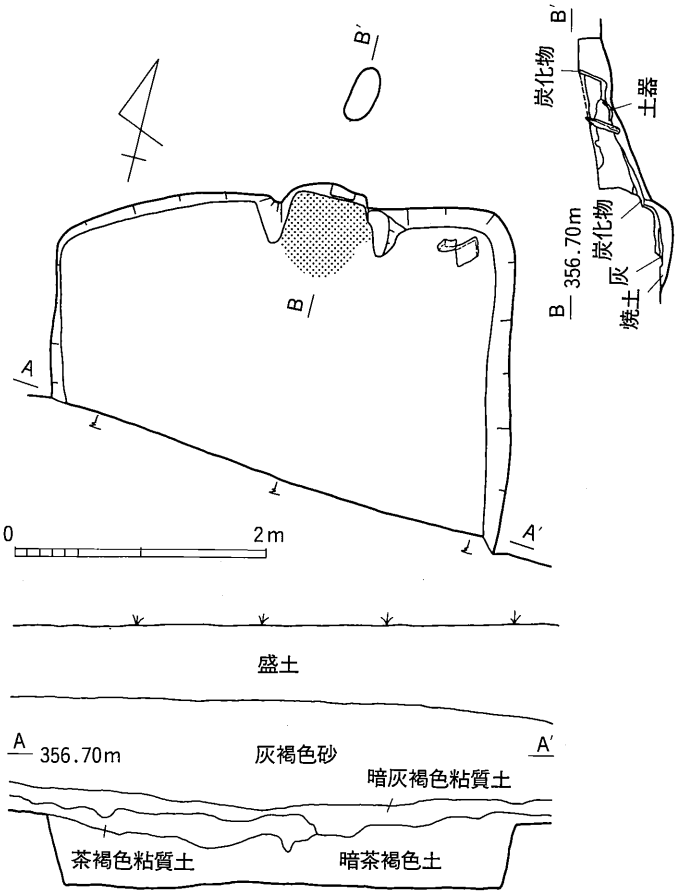
であったが、床面は良く締まっていた。

遺物：出土遺物は少ない。１～４は須恵器の杯で、底部には糸切痕を残しており、体部は直線的に開く。４は高台の付く小形の杯である。５はロクロ成形された土師器の小形甕で、６は須恵器の小形甕である。７は平行叩きの施された甕と思われる須恵器の底部である。

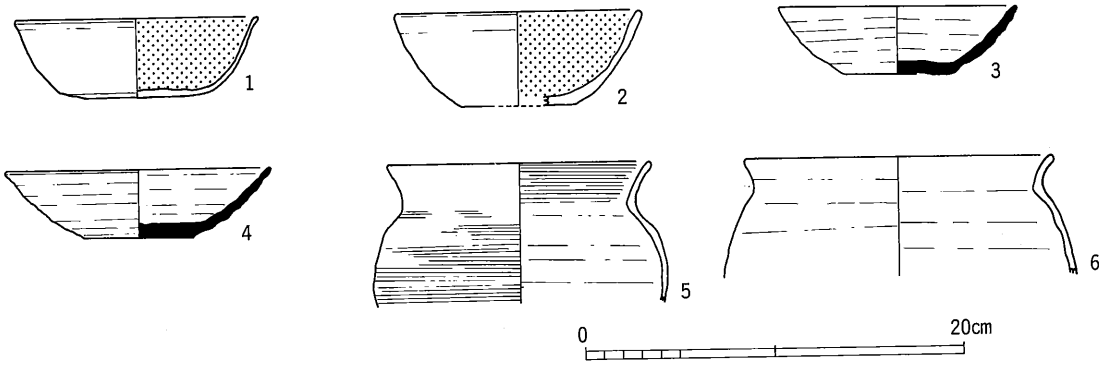
２号住居跡

構造：調査区中央東側から検出された遺構で、南側は調査区外となる。一辺3.4ｍの住居跡で、主軸方向はＮ－20°－Ｗに持つ。カマドは北壁中央やや東寄りに作られており、壁面より僅かに突出する。火床は良く焼けており、袖に石の使用は見られないが、周辺に平石が点在していることから、石組粘土製であったと思われる。煙道は東寄りに傾いて１ｍ程伸びている。壁高は最大55cmを測ることができ床面も顕著であった。

遺物：出土量は多いが小破片である。１・２は内面黒色処理された杯で、底部は丁寧にヘラケズリが施されている。３・４は須恵器の杯で底部は糸切痕をそのまま残している。５・６はロクロ調整された土師器の小形甕で、５はカキ目で器面を整えている。



第10図　２号住居跡



第11図　2号住居跡出土遺物

6号住遺跡

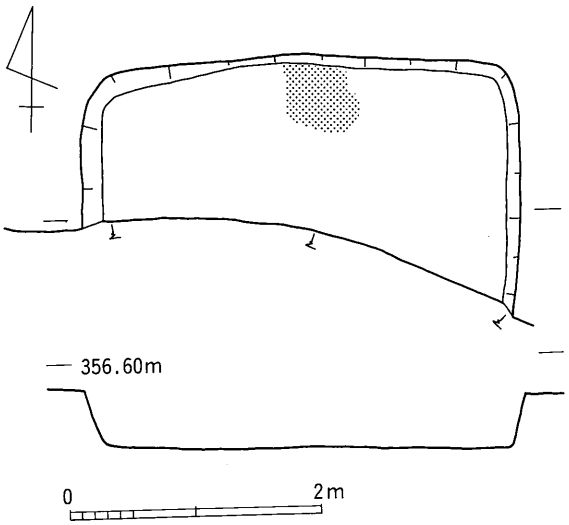
構造：調査区東端から検出された遺構で、南側は調査区外となる。一辺3.2mの住居跡で、カマドは北壁中央に作られていたが、すでに壊れており、火床のみの検出であった。主軸方向はN－10°－Wで、壁高は最大40cmを測れる。

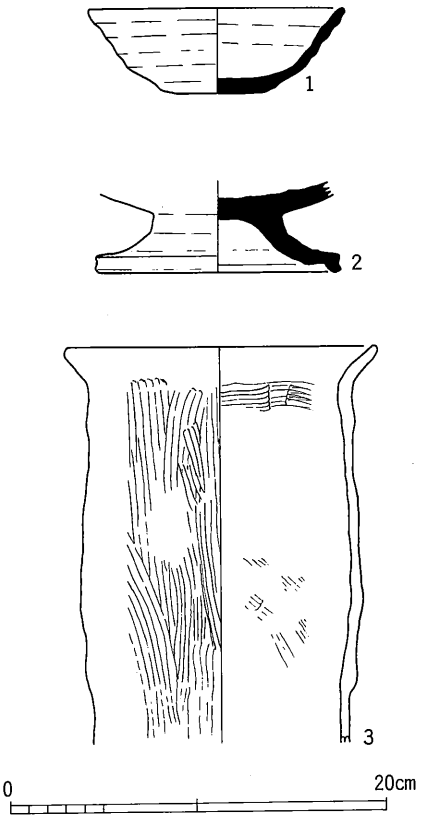
遺物：出土遺物は少ない。1は須恵器の杯でヘラオコシされた底部から体部は直線的に開く。2は須恵器の高盤で皿部を欠いている。3は長胴となる土師器の甕で、最大径を口縁部に持ち胴部はハケで整えている。

6号溝

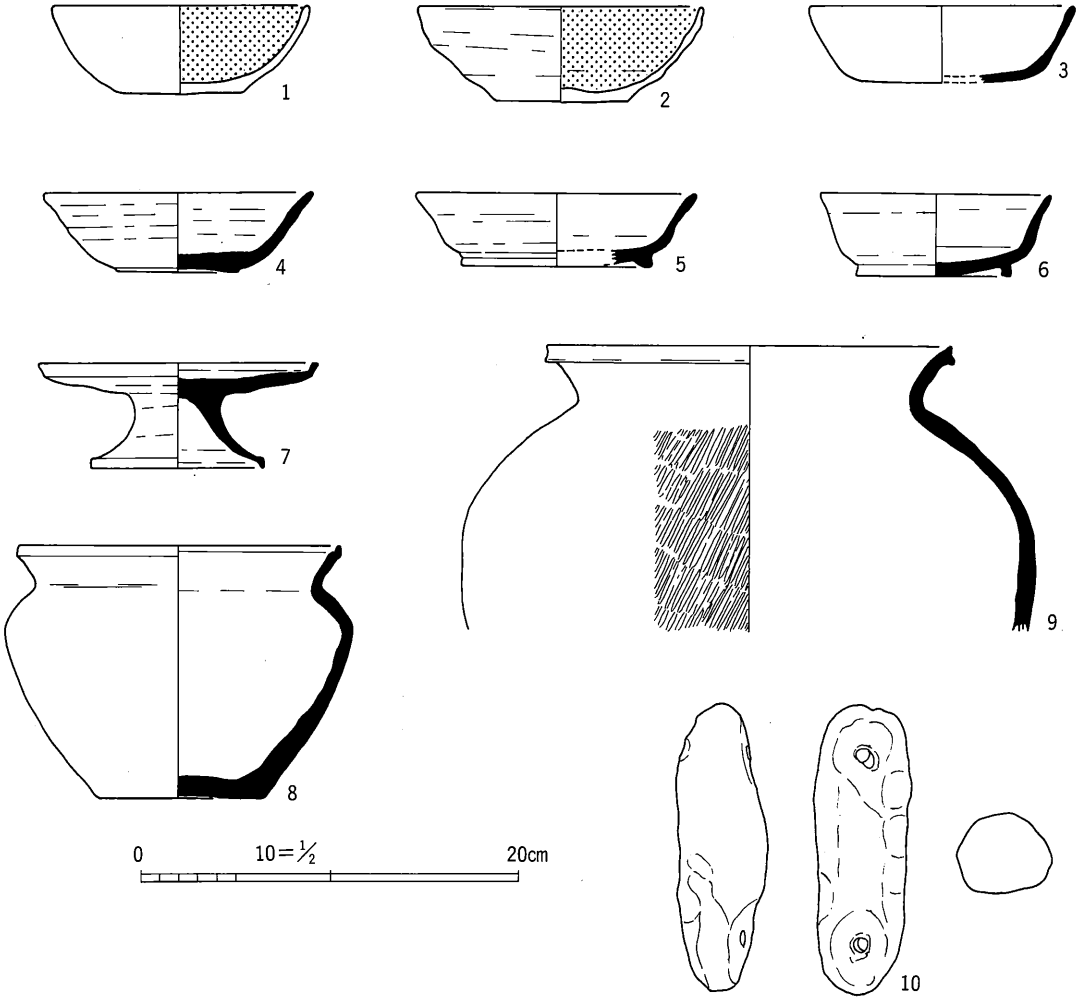
構造：調査区東側で検出された遺構で、N－50°－Eの方向に延びており、2号住居跡に切られ、3号住居跡7号溝を切って作られている。幅約2.6m深さ90cmで、底部は丸く法面は大きく外反する。底部には暗灰色の粘質土が堆積しているが、上層は砂質土となる。

遺物：覆土の上部から出土している。1・2は内面黒色処理された杯で、底部は糸切痕をそのまま残し体部は彎





第12図　6号住居跡及び出土遺物

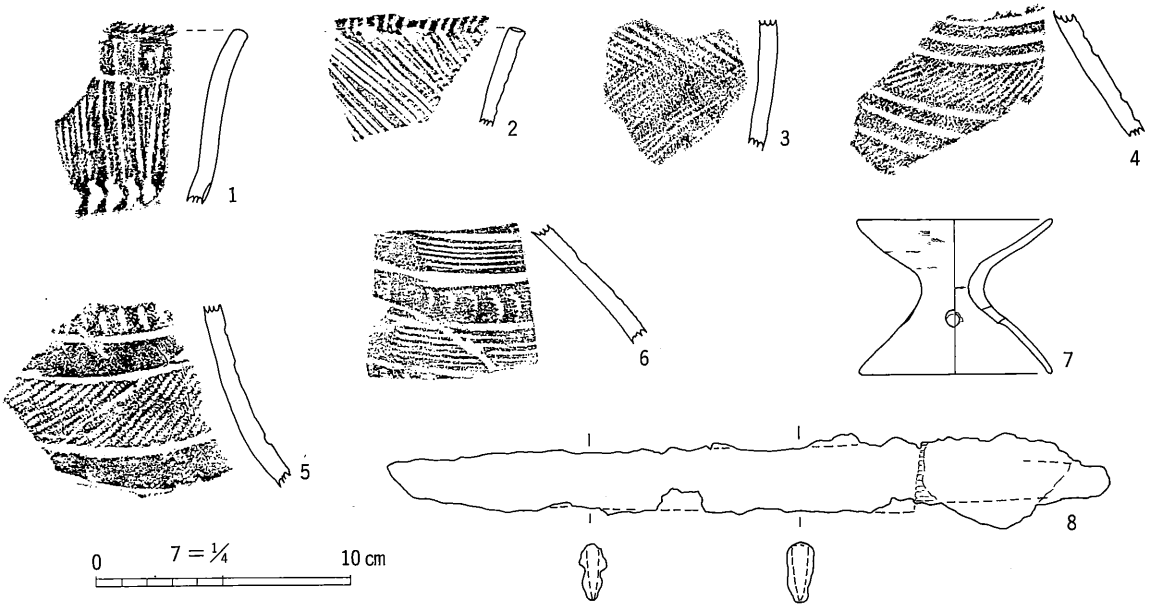


第13図　6号溝出土遺物

曲して立ち上がる。3～6は須恵器の杯で、3は底径が大きくヘラケズリを施しており、4は底部に糸切痕を残している。5・6は高台が付くもので、5は体部が大きく外反している。7は高盤で皿部は平坦で口唇部が僅かに立ち上がる。8は須恵器の鉢で肩部は明瞭な稜をなし、口唇端部は僅かに立ち上がる。9は平行叩きが施された須恵器の甕で胴下半部を欠く。10は土師質の土製品である。両端を扁平に押しつぶし穿孔しているが、紐擦れなどは観察できない。

その他の遺物

グリットからの出土遺物は多い。主体をなすのは平安時代の遺物であるが、弥生時代から中世に至る遺物が出土している。1～6は弥生時代中期後半の栗林式土器で、遺構の検出はなかったが、調査区全域から出土している。1・2は甕の口縁部で口縁端部には縄文や刻みが施されている。3は甕の胴部で櫛歯状の工具による羽状文が施されている。4～6は壺の頸部付近の破片で、縄文あるいは櫛歯状工具による平行線を沈線で区画し文様帯を作っている。7は器台で脚部に3孔の透かしが穿かれている。8は検出面より出土した刀子で、柄の部分に鹿角あるいは骨と思われる痕跡がみられる。



第14図　その他の遺物

第4章　ま　と　め

今回の調査は道路建設に伴うものであり、幅4.5mと狭い範囲での調査のため、全容を知り得た遺構はなかった。しかし、屋代高等学校改築の際7次にわたり、約6,000m²の調査が実施された馬口遺跡の北側に接する遺跡であり、どのような結果が得られるのか注目された。

住居跡は7棟検出されているが、8世紀から9世紀に構築されたものであり、調査区東側に集中している。したがって、集落としては、馬口遺跡よりむしろ松ヶ崎遺跡との関係が考えられる。

更埴市内で方形周溝墓と考えられる遺構は、小島遺跡で検出された1例を除き検出されていない。小島遺跡も道路建設に伴い実施された調査であり、遺構の一部を調査できたにすぎず、規模などは不明であるが、底部穿孔された壷や甕などが出土している。今回検出された1号溝はその形状から方形周溝墓と想定できるもので、一辺6m前後が考えられる。出土遺物から小島遺跡のものよりも古く、箱清水式土器の影響を強く残していることから、3世紀末から4世紀初頭が与えられる。この他、円形の周溝墓も含め市内での検出はない。

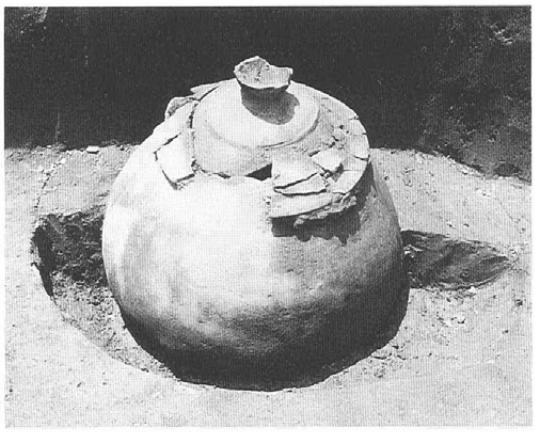
これに対して、千曲川西岸となる長野市篠ノ井遺跡群では、周溝墓が100基近く検出されている。時代は弥生時代後半の箱清水式期から古墳時代で、形態も方形・円形・前方後方形が見られる。

今回の調査地点は、篠ノ井遺跡群で周溝墓が検出された地点の対岸にあたり、直線距離で1.5km程しか離れていない。地形的にも千曲川東岸、西岸の差はあるものの、共に自然堤防内側の縁辺部であり、良く似た地形となっている。周辺の調査が進まないと明らかではないが、周辺に方形周溝墓群が存在する可能性がある。

2基検出された土器棺は、いずれも5世紀で、1号が先行すると考えられる。また埋葬は出土した骨から幼児と思われるが再葬であろう。弥生時代においては、まれに検出例はあるが、古墳時代にはほとんど検出されておらず、貴重な発見といえる。

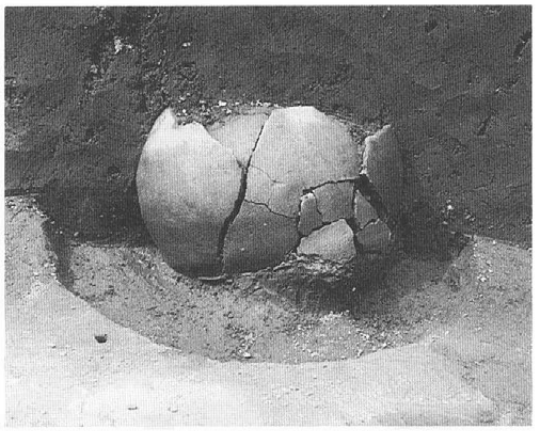
更埴市における森将軍塚古墳構築前後の埋葬施設は不明な点が多く、今後の調査に期待したい。

図版 1



左：調査区全景

右：1号土器棺



2号土器棺

1号溝

1号住居跡

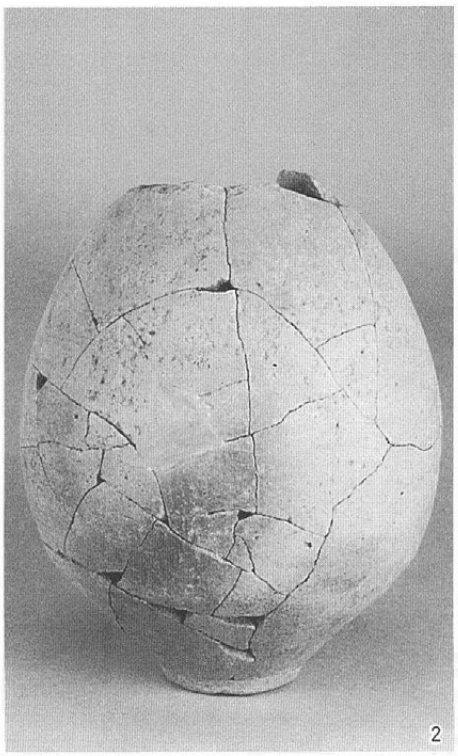
2 号住居跡

1 号溝出土遺物

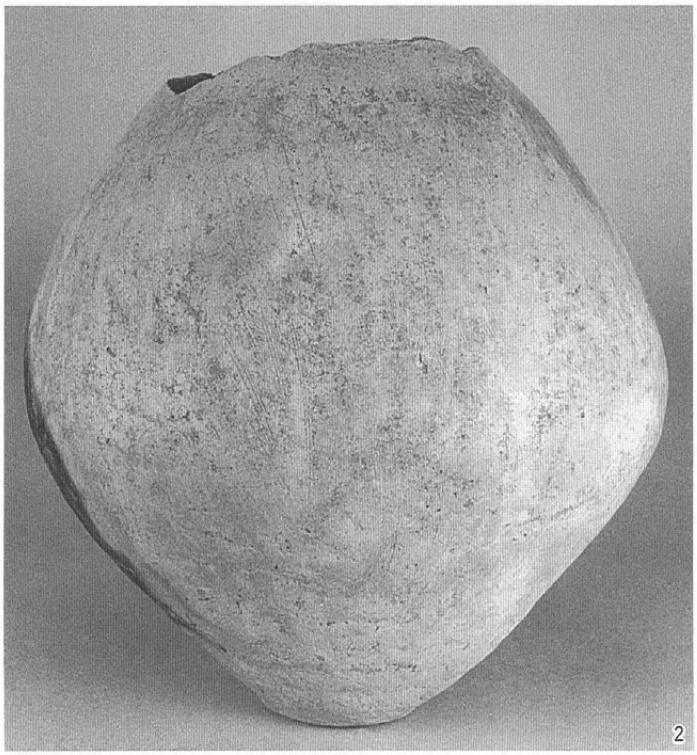
1

1 号土器棺出土遺物

1



2

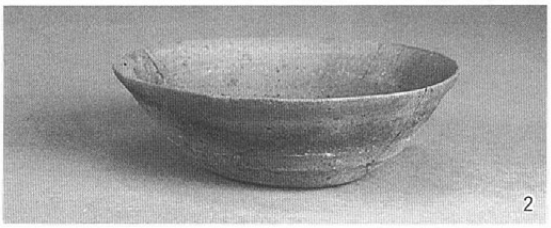


2

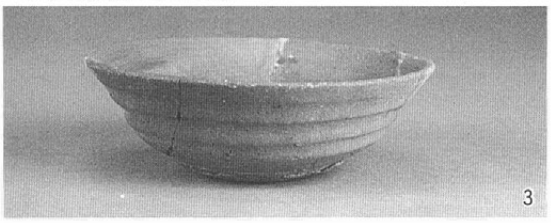
図版 3

2 号土器棺出土遺物

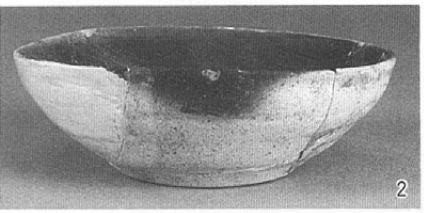
1 号住居跡出土遺物

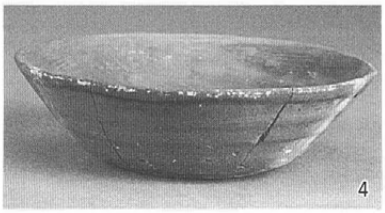


6 号住居跡出土遺物

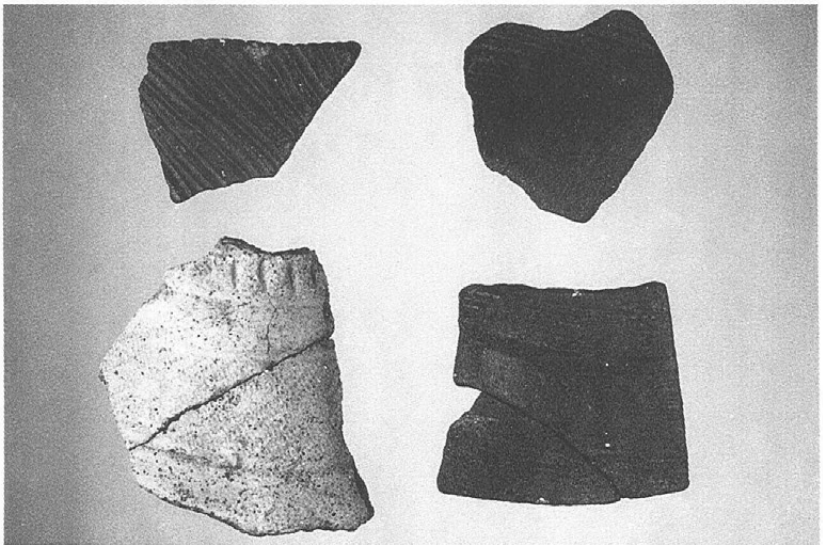


6 号溝出土遺物





その他の遺物



2　宮裏遺跡

第1章　調査の概要

第1節　概　要

1　調査遺跡名　粟佐(あわさ)遺跡群　宮裏(みやうら)遺跡　　(市台帳№28－13)

2　所在地及び　更埴市大字屋代1881

　土地所有者　更埴市大字屋代1881　更埴建設事務所

3　原因及び　更埴建設事務所新築工事

　事業者　更埴建設事務所

4　調査内容　発掘調査　　調査面積　約1,100㎡(平成5年度 700㎡　平成6年度 400㎡)

5　調査期間　平成5年度　10月1日～11月9日

　　平成6年度　9月12日～9月20日　12月12日～12月22日

6　調査費用　平成5年度　3,200,000円

　　平成6年度　2,950,000円

7　調査主体者　更埴市教育委員会

　担当者　佐藤信之　更埴市教育委員会

　調査員　竹田眞人　筑波大学学生

　　塚田泰司　國學院大學学生

　調査参加者　猿渡久人　大井操子　金井順子　金田良一　久保啓子　小林千春　小林昌子

　　小林芳白　越石義信　高野貞子　富沢豊延　中村久美子　中村文恵　永井　勇

　　長坂堯義　西沢豊重　根石俊明　宮崎恵子　宮崎忠夫　村山　豊

　事務局　山崎芳之　下崎雅信　矢島宏雄　佐藤信之　小野紀男

　種別・時期　集落跡　平安時代

　　墓　中　世

　遺構・遺物　平安時代　竪穴住居　2棟

　　中　世　竪穴状遺構　5基　井戸　2基　土坑　80基

　　出土遺物　コンテナ10箱

第２節　調査の経過

平成４年10月、更埴建設事務所から、平成５年度に庁舎の新築を計画しているとの連絡があった。市教育委員会では隣接する県道拡幅の際、埋蔵文化財が確認されていることから、発掘調査が必要であると伝えた。11月16日、更埴建設事務所より仮庁舎建設部分も含めて試掘調査の実施について依頼があった。市教育委員会で12月２日、試掘調査を実施した結果、仮庁舎建設部分からは埋蔵文化財は、検出されなかったが、庁舎建設部分では埋蔵文化財の存在を確認したため、発掘調査が必要であると伝えた。

平成５年度に入り、４月６日、県教育委員会、更埴建設事務所、市教育委員会により協議が行われ庁舎部分については発掘調査を実施して保護に当たることとなった。また工事が２年に渡るため、平成５年度は庁舎本体部分、６年度は付属施設について実施することとなった。５月６日、調査計画書を提出し調査準備に入った。９月29日、更埴建設事務所と更埴市の間に委託契約が締結され、10月１日から調査に入った。11月９日、調査は無事終了したが、検出された遺構が中世の土坑墓群で、調査費用が減額できたため、平成６年１月19日、委託契約の変更を行った。

平成６年度に入り、６月28日、調査を予定している部分にある旧建物の入口を確保しなければならないため、調査を２回に分けて実施してほしいとの連絡があり協議を行った。８月11日、平成６年度調査について委託契約の締結を行った。調査は9月12日～25日と12月12日～22日に分けて行った。

第３節　調査日誌

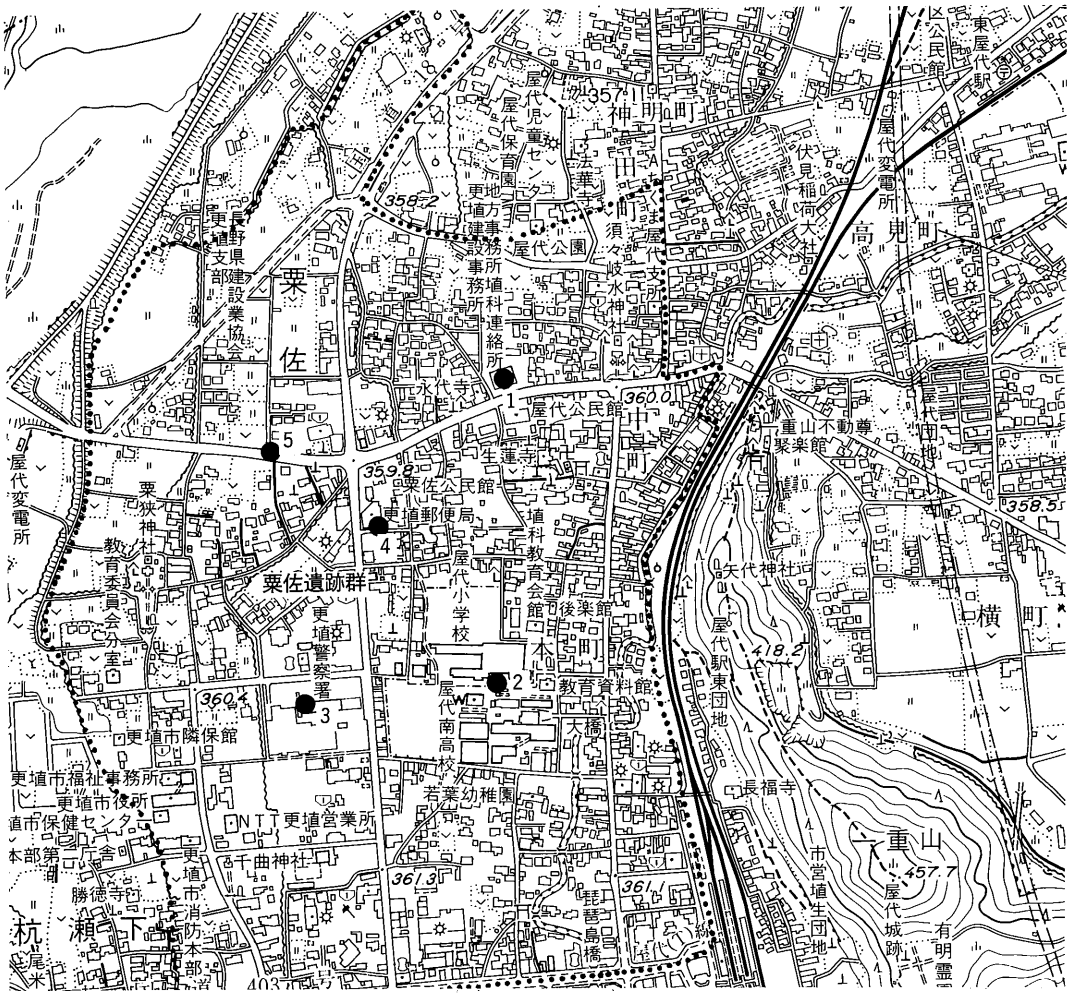
平成５年９月29日　発掘調査機材搬入し、重機により表土除去を始める。
10月１日　作業員入り遺構検出開始。
７日　多数の土坑を検出し、掘り下げを始める。
12日　21号土坑より人骨の頭部検出。
22日　重機により浄化槽部分掘り下げ。
24日　精査を行い全体写真撮影。
11月５日　調査完了し埋め戻す。
平成６年９月８日　シルバー人材センターへ作業員を委託し、車庫Ａ棟部分調査開始。
20日　最初の住居跡検出。
25日　全体写真の撮影を行い調査完了。
12月12日　既在の建設の取り壊しが完了したため、残っていた車庫Ａ棟の南側と車庫Ｂ棟部分の調査を開始する。
14日　作業員詰所棟部分調査開始。
21日　２号井戸址検出掘り下げ。
22日　雪の中すべての調査を完了し、整理作業に入る。

第２章　遺跡の環境

宮裏遺跡は、更埴市大字屋代字宮裏に位置し、大きく粟佐遺跡群として包括されている。遺跡群は千曲川によって形成された自然堤防上に位置しており、標高360m前後で東西0.5km南北1km程の広がりを持っている。また遺跡群の東側は屋代遺跡群へと続いており、東西3kmにわたって展開する大遺跡群となる。遺跡群内にあって宮裏遺跡は北端の地を占めており、遺跡の北側は千曲川の旧氾濫原となる。

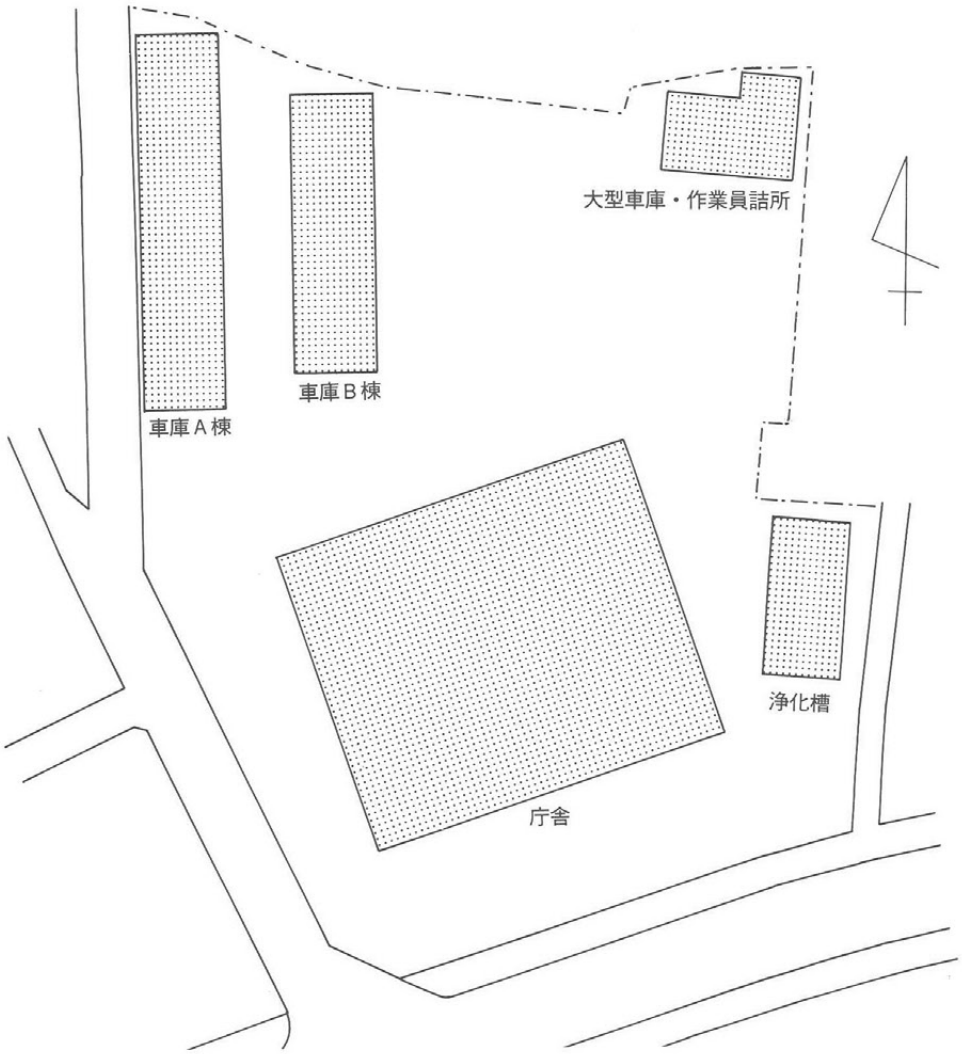
粟佐遺跡群内では、これまでに五輪堂遺跡・南沖遺跡を中心に戸崎遺跡、諏訪南沖遺跡など10件以上の調査が行われ、200棟を超える住居跡の他、掘立柱建物跡など多数の遺構が検出されている。これらの遺構は弥生時代から中世に至るもので五輪堂遺跡を中心に広がっている。

宮裏遺跡付近は住宅地域であったため、これまでに調査例がなく、その性格は不明であった。しかし東には古くから存在の知られる須々岐水神社があり、西に接する北村遺跡では、灰釉陶器の把手付広口瓶と薬壺が完形で出土しているなど注目される地域であった。



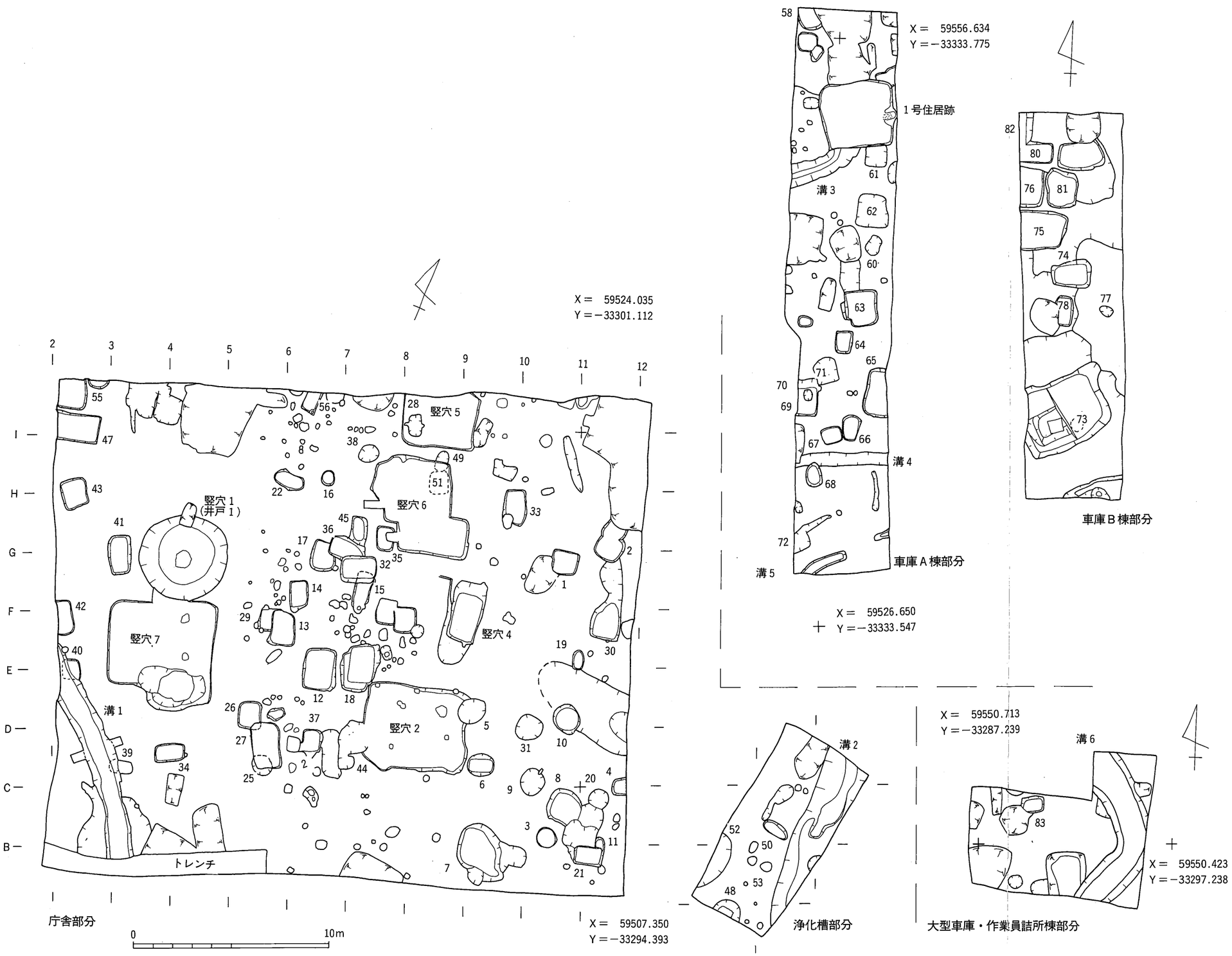
1　宮裏遺跡　2　五輪堂遺跡　3　南沖遺跡　4　戸崎遺跡　5 諏訪南沖遺跡

第15図　遺跡位置図　（1：10,000）



第16図　調査位置図

第17図　調査風景


X＝ 59524.035
Y＝−33301.112
竪穴1
(井戸1)
竪穴2
竪穴4
竪穴5
竪穴6
竪穴7
溝1
トレンチ
庁舎部分
0
10m
X＝ 59507.350
Y＝−33294.393
1号住居跡
溝3
溝4
溝5
車庫A棟部分
X＝ 59556.634
Y＝−33333.775
X＝ 59526.650
Y＝−33333.547
車庫B棟部分
溝2
浄化槽部分
溝6
X＝ 59550.713
Y＝−33287.239
X＝ 59550.423
Y＝−33297.238
大型車庫・作業員詰所棟部分

第18図　遺構全体図

第３章　遺構と遺物

第１節　平安時代

平安時代の遺構は、２棟の住居跡が検出されているが、１棟は煙道だけの検出である。遺物は僅かではあるが調査区域全面から出土している。

１号住居跡

位置：車庫Ａ棟部分　　**規模**：3.90×3.50m　　**平面形**：方形

主軸方向：Ｎ－85°－Ｗ　　**新旧関係**：61号土坑を切る。

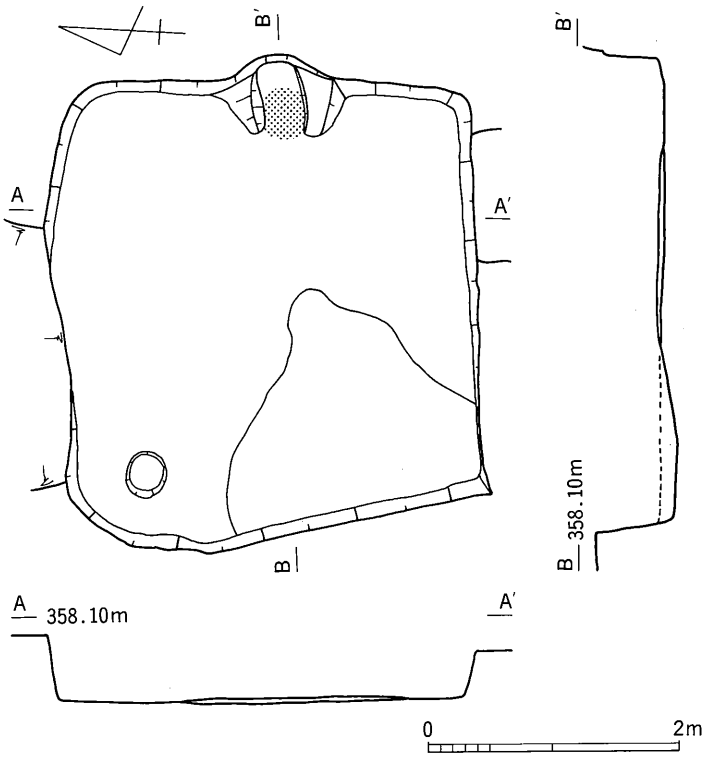
床面：カマド付近は平坦で良く締まっていたが、西側は不明確で一部掘り過ぎた部分がある。中央部分ではレンズ状に５cm程の厚みで良く締まった２枚の床面が検出されている。

壁：ほぼ垂直に立ち上がっており、最大壁高はカマド付近で45cmを測ることができる。北側の壁がやや長くなっており、隅丸になるのに対して南側の隅は直角に近い。

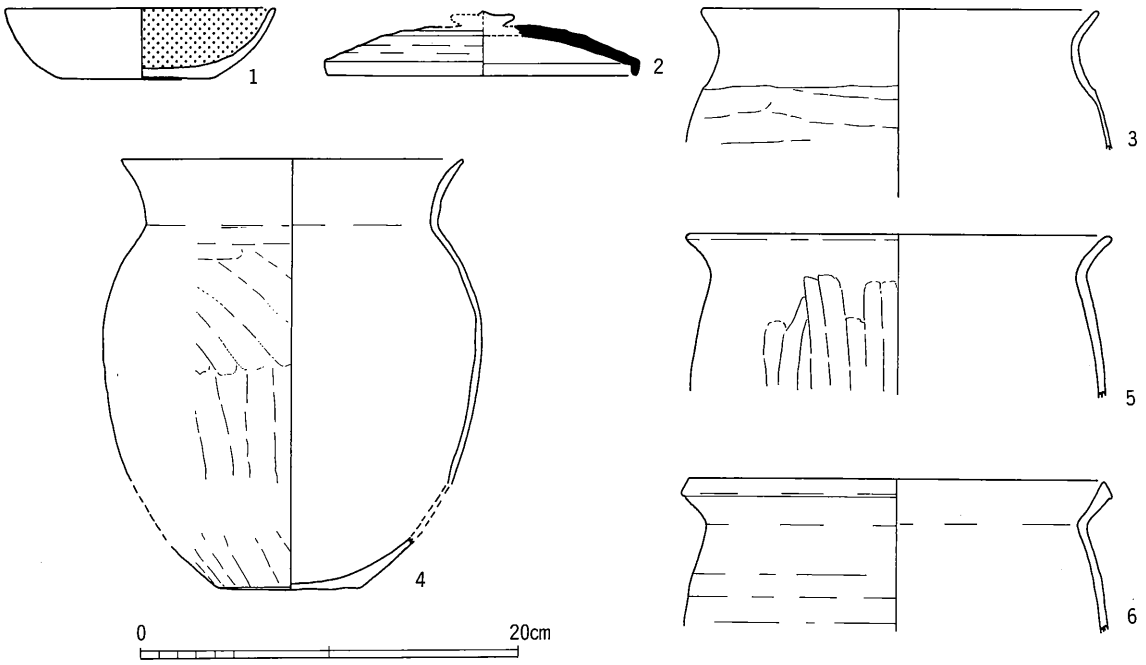
カマド：東側中央部に作られており、袖は粘土で作られており石の利用はない。火床は良く焼けており、焼土が堆積していた。

柱穴：北西隅から約直径35cm深さ20cmの柱穴が検出されているが、住居跡との関係は定かでない。

遺物：カマド内から出土している。１は内面黒色処理された土師器杯で、底部には糸切り痕を残すが体部との接点部分はヘラケズリが施されている。２は須恵器の杯蓋で、３～６は土師器の甕である。３・４は北武蔵型で、３の口縁部はくの字状に開くのに対して、４はややコの字状となる。６の口縁端部は肥大し、外傾した面をなす。



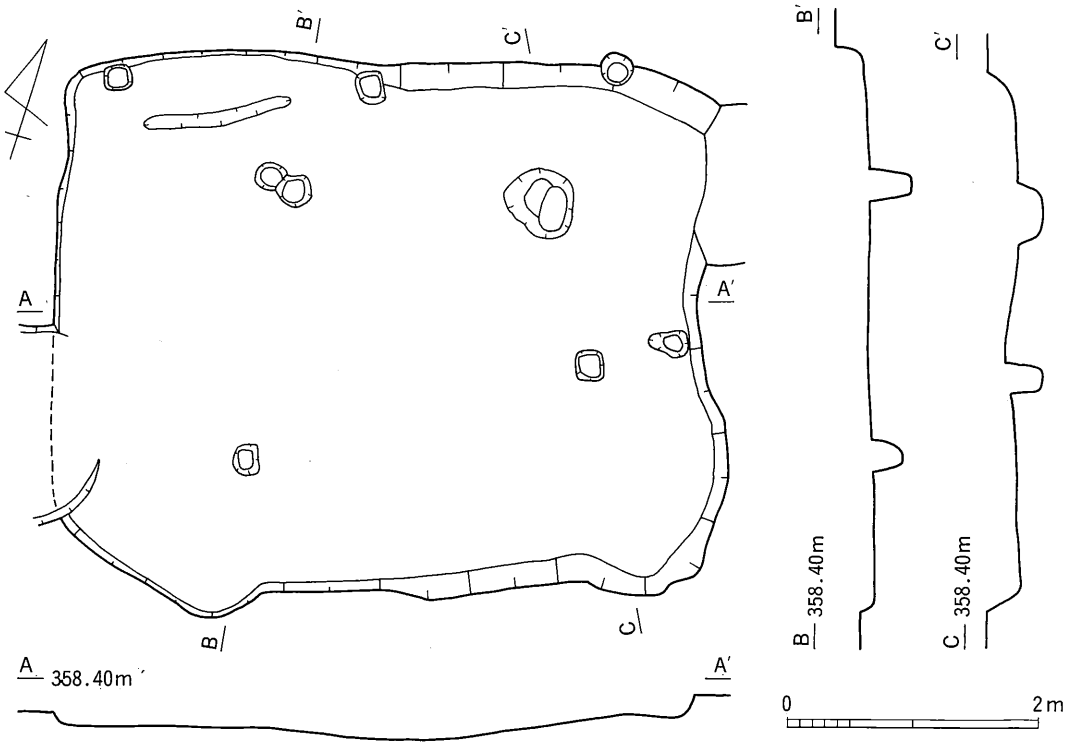
第19図　１号住居跡



第20図　1号住居跡出土遺物

第2節　中　　世

中世の遺構には、竪穴状遺構5基、井戸2基、土坑80基以上がある。今回の調査で検出された遺構の主体は中世の土坑群であり、多くは墓であると考えられるが、2基を除き人骨の出土はなく、遺構に伴う遺物も少ないため、その性格は不明な点が多い。



第21図　2号竪穴状遺構

2号竪穴状遺構

位置：C・D－7・8　　**規模**：5.10×4.20m　　**平面形**：不整方形

長軸方向：N－75°－E　　**新旧関係**：2・44土坑に切られる。

床面：小さな凹凸はなかったが、全体的に起伏があり、軟弱であった。

壁：最大壁高25cmを測ることができるが、立ち上がりはなだらかで、不明確な部分が多い。

柱穴：壁面から約1m入った部分から4本検出されているが、整然とした並びは示していない。北東隅に当たる部分は直径50cm程であったが、他は25cm前後で深さは30～25cmを測れる。また北壁には約2mの間隔を持って3本、東壁中央から、1本の柱穴が検出されている。いずれも壁面に接しており、直径25cm前後で床面からの深さは約20cm程である。

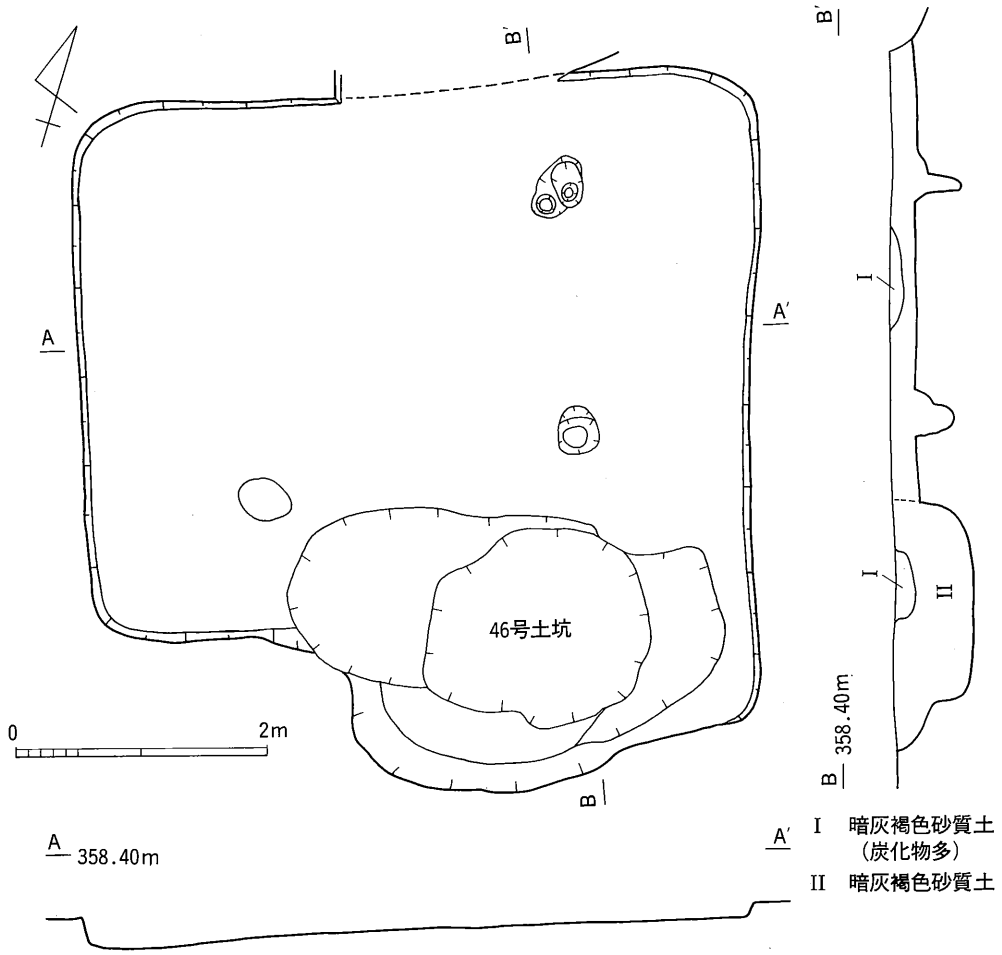
遺物：青磁碗、土器皿の小破片が僅かに出土している。また、釘と思われる鉄製品の破片が3点出土しているが、腐食が進んでおり、形状は不明である。

7号竪穴状遺構

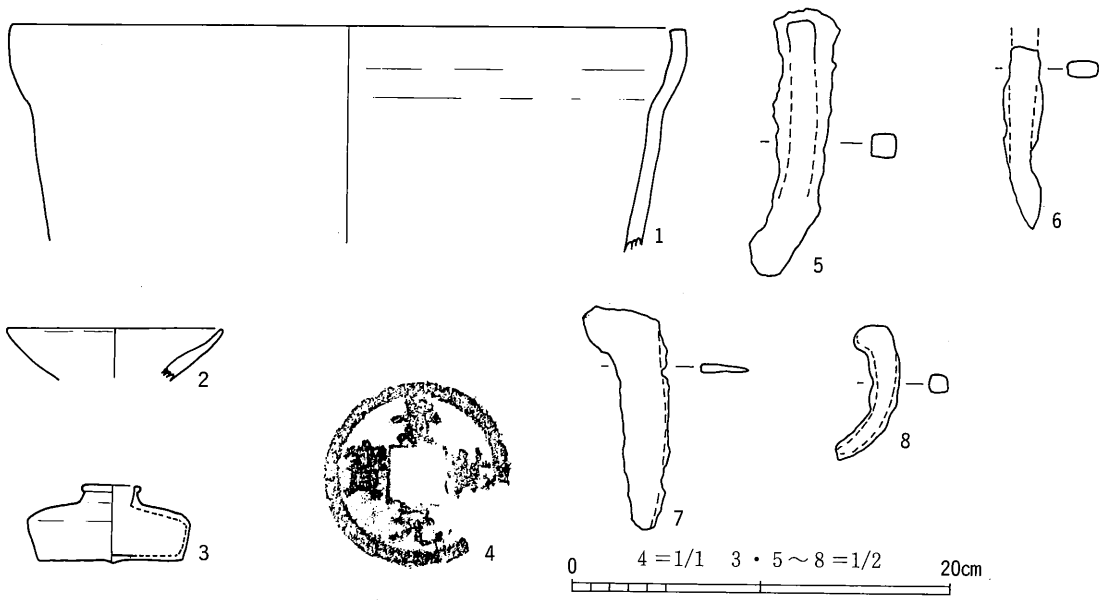
位置：D・E－3・4　　**規模**：5.35×4.25m　　**平面形**：隅丸方形

主軸方向：N－70°－E　　**新旧関係**：46号土坑、1号井戸跡に切られる。

床面：比較的平坦であったが、全体的に西へ傾いていた。あまり締まっていなかったため、検出は難しく一部推定となる部分がある。



第22図　7号竪穴状遺構

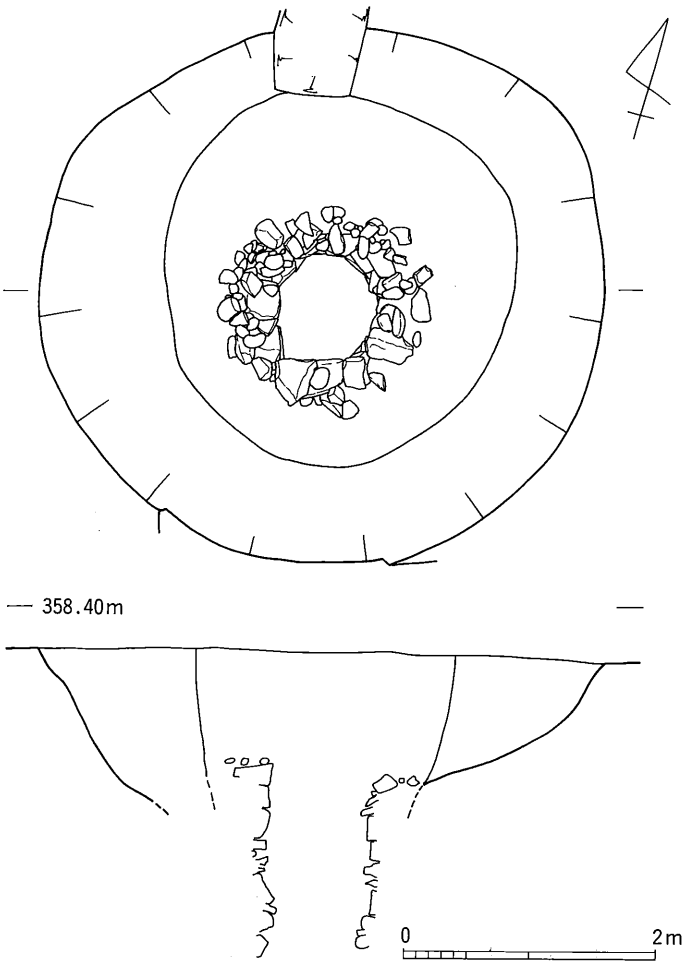


第23図　7号竪穴状遺構出土遺物

壁：西壁で最大壁高23cmを測ることができる。南東隅は46号土坑と切り合っているため突出するが、本来は南西隅からの延長線上が壁面であったと思われる。

柱穴：東壁に添って2本検出されており、直径30～20cmで深さは40～30cmを測ることができる。南西側にみられるのは撹乱であり柱穴ではない。

遺物：内耳鍋、土器皿、珠洲系の擂鉢の破片などが僅かに出土したほか、銅製と思われる器高2.1cm胴部径4.3cmの小壺、北宋銭である景祐元宝、用途のわからない鉄製品5点が出土している。



第24図　1号井戸跡

1号井戸跡

位置：F・G－3・4

規模：(掘形) 直径×3.50m

平面形：円形

新旧関係：7号竪穴状遺構を切る

構造：平面形がほぼ真円となる掘形から約1m掘り込んだ部分でなだらかなテラス状の面を成し、さらに1.5m程垂直に近く掘り込んでいる。このテラス面から下部には板状の石を利用し、小口を内側

にそろえた内径約80cmの石積みが底部まで行われている。内部から多数の板石が出土していることから、この石積みは検出面付近まであったものと思われる。また最下部からは腐食した木材が出土していることから、木材で井形を組みそこから石積みを行っているものと思われる。

遺物：覆土上面からは珠洲系の擂鉢や土器皿などが出土しているが、石積み内部からは遺物の出土がなく、混入したものと思われる。

2号井戸跡

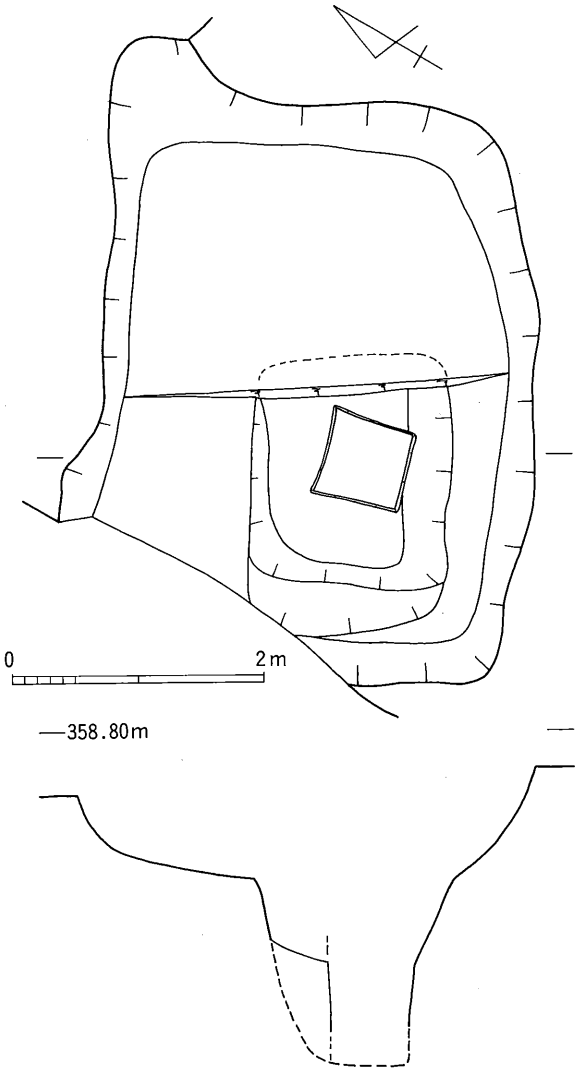
位置：車庫B棟　　**規模**：4.65×3.40m

平面形：隅丸長方形

長軸方向：N－5°－W

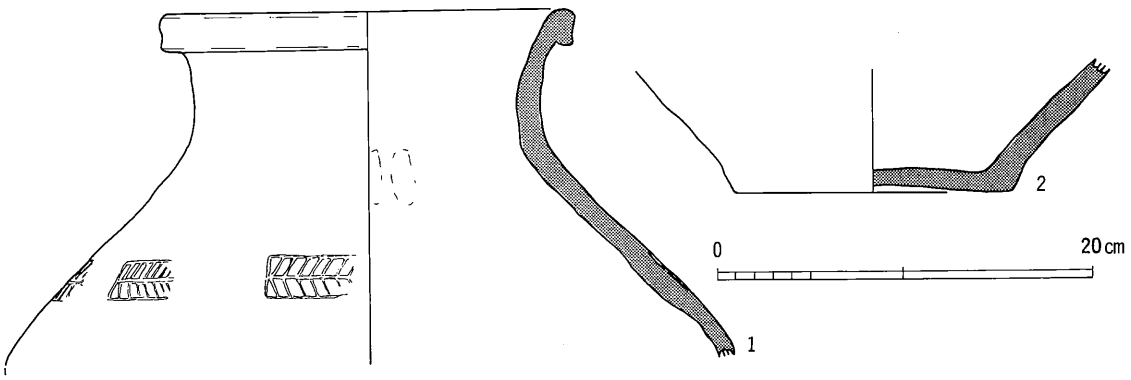
新旧関係：7号土坑に切られる。

構造：東側は掘形の途中で掘り下げを中断したが、西側部分から井戸枠の痕跡を検出している。井戸枠の痕跡は掘形中央部からやや南東に寄った部分にあり、1号井戸跡同様テラス状をなした掘形中段から、垂直に近く掘り込まれた掘形内から検出されている。北側が僅かに広がるが一辺65cm程の方形で、各辺は弧をなしている。これは井戸枠の板材を四隅に杭を立てて固定していたため、土の重さで内側に押し出されたものと思われる。深さは底部まで掘り下げなかったため明確ではないが、検土棒による調査では、検出面から2.4m程である。



第25図　2号井戸跡

遺物：掘形中段のテラス面付近から常滑の壺が出土している。肩部には押印帯が巡らされており、口縁部の緑帯は器面に付着している。口縁部と底部は同一個体と思われる。また井戸枠内からは漆器の断片が出土している。



第26図　2号井戸跡出土遺物

10号土坑

位置：D－10　　**規模**：直径115cm　　**平面形**：円形

構造：真円に近い掘り込みで、検出は容易であった。底部は周囲が幅10cm深さ5cm程の溝状に低くなっており、中央部分が高くなる。この高くなった部分は良く締まっており移植ゴテが刺さらない程であった。

遺物：覆土中より内耳土器の小破片が出土しているが、近世陶器も含まれているため、近世の遺構の可能性もある。

11号土坑

位置：B－11　　**規模**：(80)×35cm　　**平面形**：隅丸長方形　　**長軸方向**：N－20°－W

構造：風化が進んでおりすでに原形を失っているが、北側から埋葬人骨の頭骨が出土していることから、土坑墓と判断できる遺構である。掘り込みは比較的なだらかで、南側が21号土坑に切られているため、正確な規模については不明であるが、検出できた部分から想定すると、屈葬であったと考えられる。

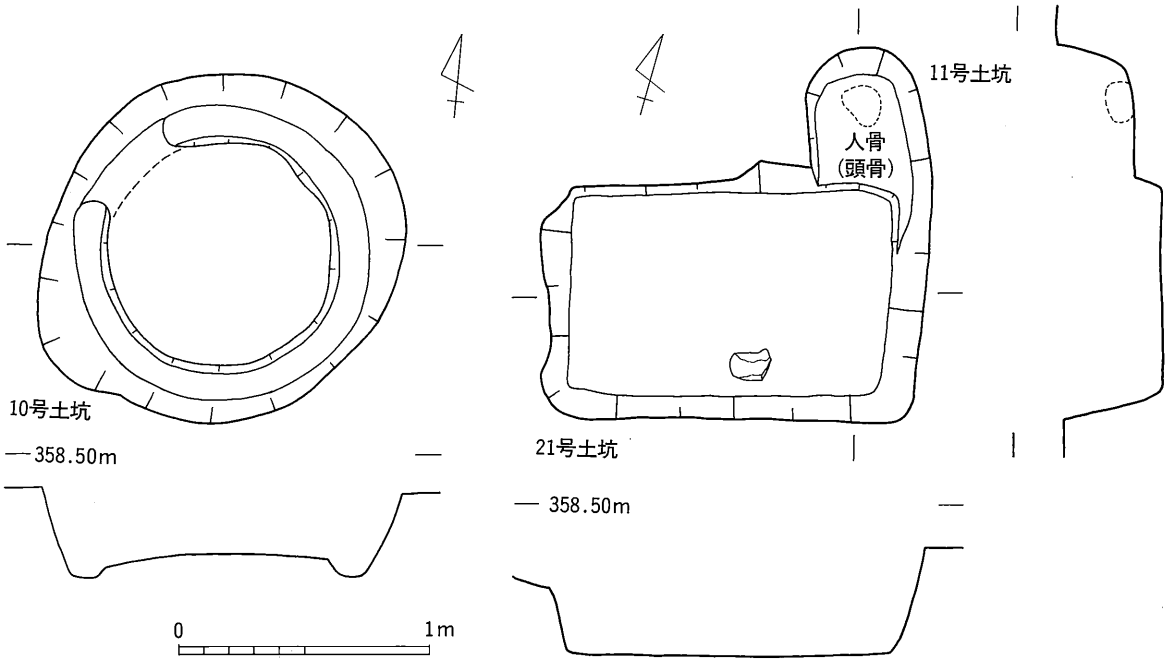
遺物：覆土中より聖宗元宝１枚が出土している。

21号土坑

位置：A－11　　**規模**：120×80cm　　**平面形**：長方形　　**長軸方向**：N－75°－W

構造：形の整った長方形で、掘り込み顕著であり、底部は平坦であった。床面付近より人骨と思われる小片が出土している。

遺物：人骨以外に出土遺物はない。



第27図　10・11・21号土坑

12号土坑

位置：E－6

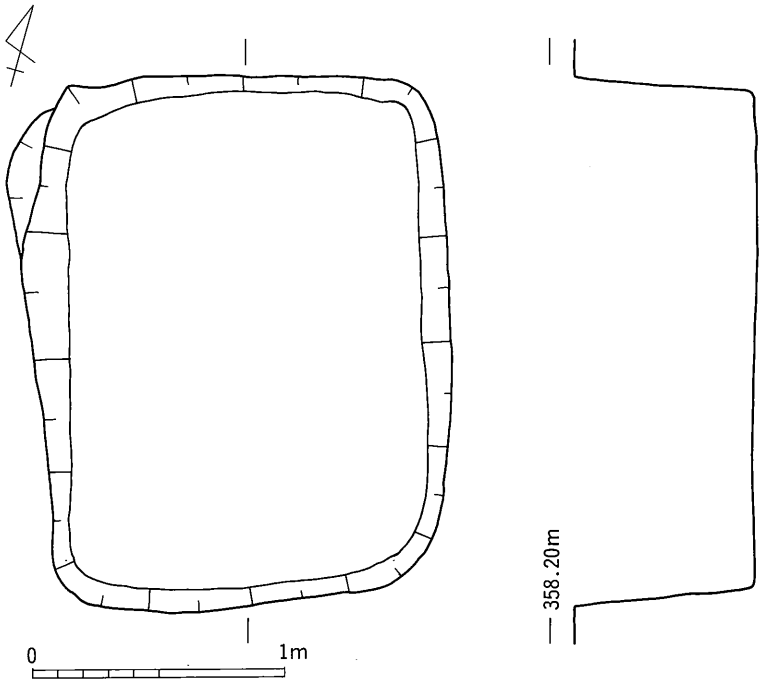
規模：200×140cm

平面形：長方形

長軸方向：N－15°－W

構造：掘り込みは顕著で垂直に近く、覆土を掘り下げると壁面から剝れる程であった。底部は平坦であったが、特に締まった部分などはない。また、覆土も砂質の暗灰褐色一層であった。

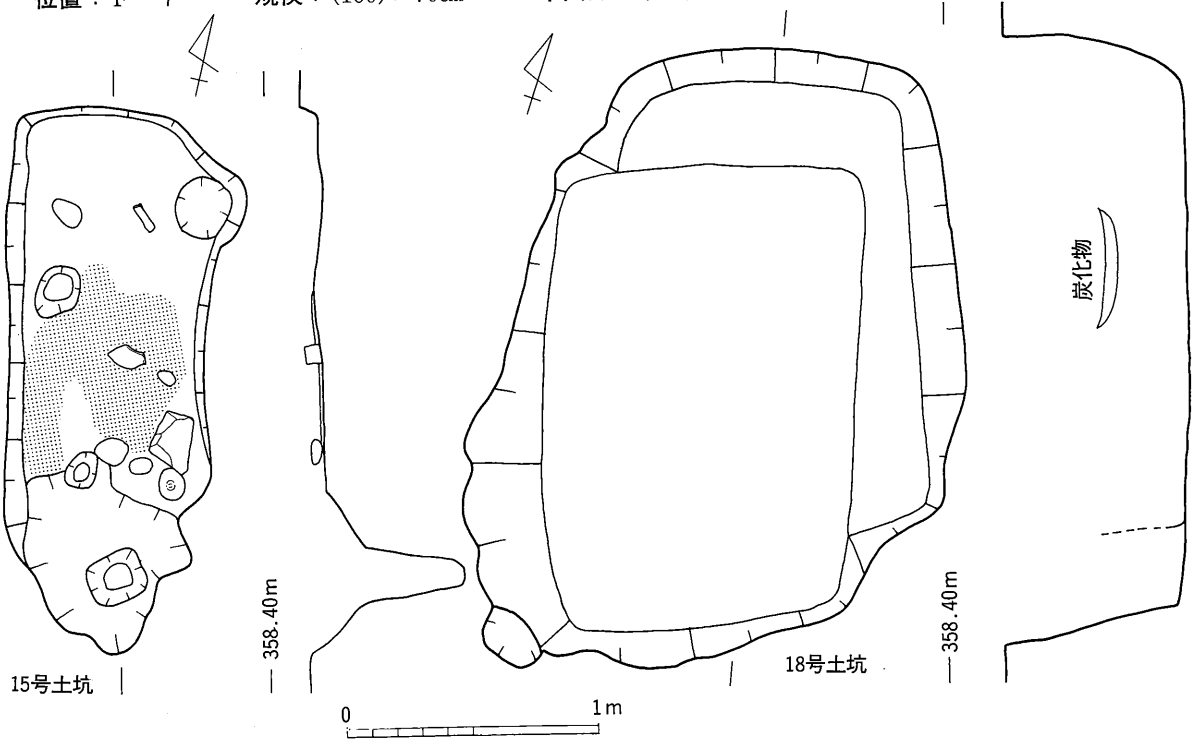
遺物：珠洲系擂鉢、古銭4枚(景祐元宝1・元祐通宝1・不明2)釘3本、馬の歯が出土している。釘は2本が完形で長さ8cmと9.2cmを測れるが、他は不明である。また、錆が進んでおり角釘であることは分かるが、細かな点は観察できない。擂鉢、馬の歯は覆土内からの出土であるが、古銭と釘は底部付近から出土している。



第28図　12号土坑

15号土坑

位置：F－7　**規模**：(160)×70cm　**平面形**：不整長方形　**長軸方向**：N－15°－W



第29図　15・18号土坑

構造：36号土坑を切って作られている。浅い土坑で底部には小さな凹凸があるが、南側の深い掘り込みは、この遺構とは関係ないものと思われる。覆土内には握り拳大の石を中心に10個程の石が含まれており、その中に砥石や凹石がある。底部よりやや浮いた状態で中央部分を中心に炭化物が広がっているが、底部に火を受けた痕跡は見られない。

遺物：土器皿、釘、凹石、砥石２点がある。土器皿は小片で図化できないが、底部に糸切り痕が残っている。凹石は多孔質安山岩、砥石は泥岩製である。

18号土坑

位置：Ｅ－７　**規模**：(旧) 185×125cm　(新) 180×115cm　**平面形**：長方形

長軸方向：(旧) Ｎ－15°－Ｗ　(新) Ｎ－25°－Ｗ

構造：掘り下げ段階で２基の土坑が切り合っていることが分かったが、すでに大半を掘り下げていたため、１基の土坑として扱った。おそらく北東側に張り出した部分が最初に作られ、それを切って南西側が作られたものと思われるが、断面の観察では分からなかった。規模もほぼ同じで両者にはさほど時間差はないものと思われる。覆土は砂質の暗灰褐色土で、底部から25cm程浮いた部分にはレンズ状に炭化物層が観察できる。

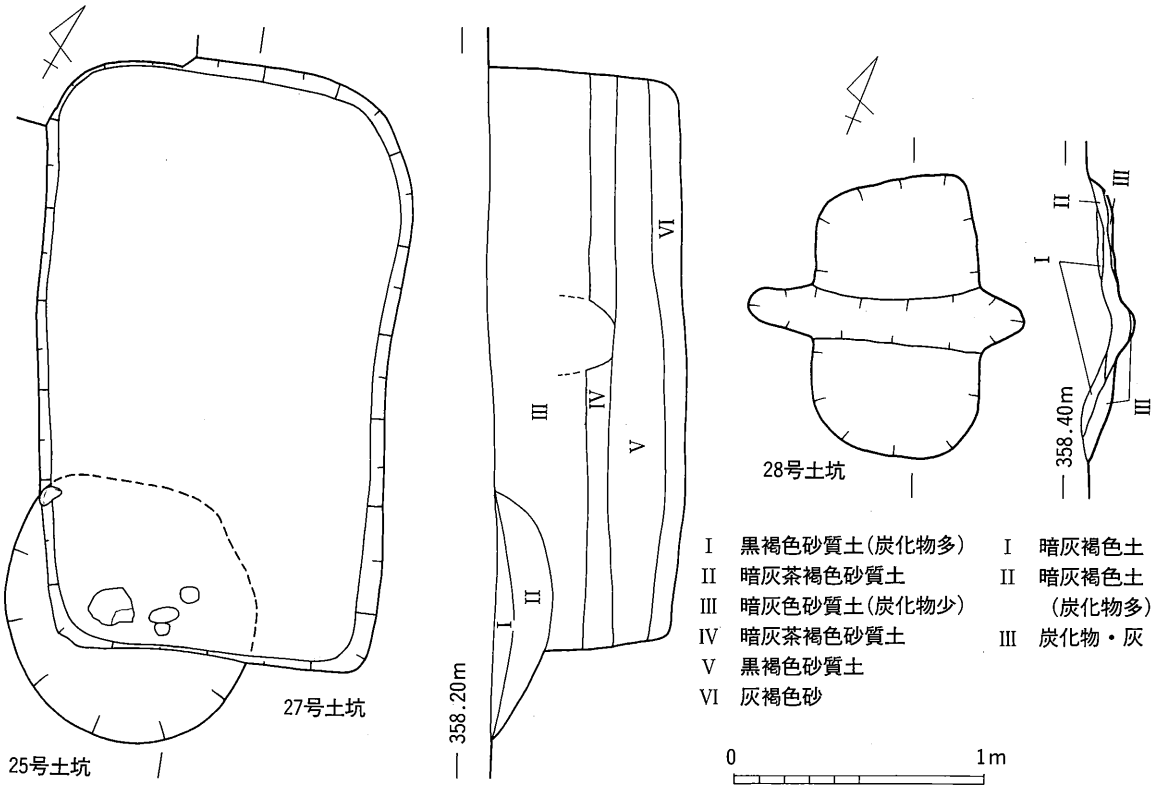
遺物：土器皿の小破片、不明古銭がある。

25号土坑

位置：Ｃ－５　**規模**：直径100cm　**平面形**：円形

構造：27号土坑を切って作られている。擂鉢状に掘り込まれおり、平坦な底部を持っていない。底部付近に握り拳大の川原石数個が点在している。

遺物：出土遺物はない。



第30図　25・27・28号土坑

27号土坑

位置：C－5　　**規模**：225×130cm　　**平面形**：長方形　　**長軸方向**：N－25°－W

構造：25・26号土坑に切られている。北壁が僅かに開く長方形の土坑で、掘り込みは垂直に近い。底部は平坦であったが、中央付近が僅かに窪んでいる。覆土上層には炭化物を含んでいる。

遺物：釘と思われる鉄製品が3点出土しているが、破片であり詳細は不明である。

28号土坑

位置：H－8　　**規模**：110×65cm　　**平面形**：不整長方形　　**長軸方向**：N－25°－W

構造：5号竪穴状遺構の覆土中に作られている。東壁が広がる台形状で、東西に突出部を持つ。この突出部は溝状の落ち込みとなり、土坑を横断している。検出面からの深さは8cmと浅いが、上部から炭化物の存在を確認しており、もっと深いものであったと思われる。平坦な底部はもっておらず、底部に接して炭化物と灰の層が確認されており、II層中から粉末状の焼骨が出土している。

遺物：焼骨以外に出土遺物はない。

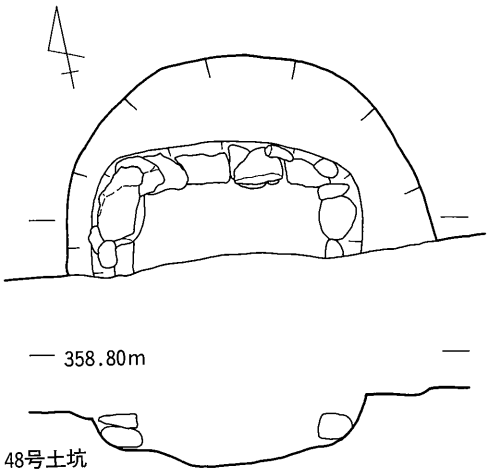
48号土坑

位置：浄化槽部分　　**規模**：75cm×

平面形：方形？

構造：南側が調査区外になるため全景は不明であるが、幅145cm程の浅い掘形内を、更に幅110cm深さ25cmに掘り込んで、板状の石を小口を内側にそろえて2段に重ねている。底部は中央部が窪んでおり、特に締まった部分などはない。

遺物：土器皿の小破片が1点出土している。



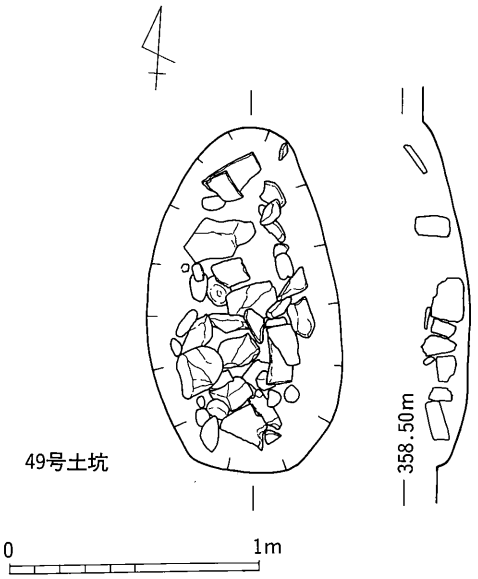
49号土坑

位置：H－8　　**規模**：135×75cm

平面形：不整形　　**長軸方向**：N－5°－W

構造：51号土坑・6号竪穴状遺構を切って作られている。掘り込みはなだらかで、底部に稜を持たない。内部からは20cm前後の角礫や握り拳大の川原石が多数検出されているが、規則的に積んだ形跡はない。

遺物：古瀬戸の碗と古墳時代の高杯の脚部が出土している。



第31図　48・49号土坑

65号土坑

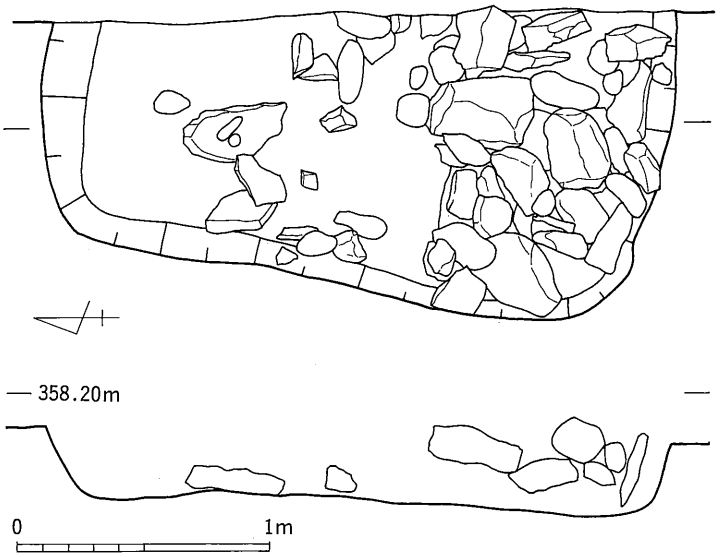
位置：車庫B棟

規模：220cm×

平面形：方形？

構造：東側が調査区外となるが、掘り込みは明確で内部に人頭大から握り拳大の角礫が多数含まれている。石は南側に集中しているが、積み方に規則性は見られない。覆土は暗灰褐色の粘性を持つ砂であった。

遺物：珠洲系の擂鉢の破片と釘と思われる鉄製品、土錘が出土している。



第32図　65号土坑

土坑・グリットの出土遺物

中世土坑群が主体をなすという遺跡の性格もあり、遺物の出土量は非常に少ない。中世にかかわる遺物としては、土器皿、内耳鍋、などの素焼きの焼き物、擂鉢、碗、壺といった陶磁器の他、釘などの金属器、貨幣、石器などがある。

土器皿は、いわゆる「かわらけ」で、小破片ではあるがおそらく数10個体はあるものと思われる。多くは検出面からの出土であり、遺構との関係は不明である。いずれもロクロ成形されており、底部に糸切痕を残している。胎土には粉質灰白色、赤褐色、そして暗灰色の須恵質のものが見られるが、灰白色のものが圧倒的に多い。口径が10cm以下の物（1～4）と、12cm前後となる物（5～8）が見られるが全体の割合は不明である。

内耳鍋は、破片が数点出土しており、口縁部が外反する物と、直線的に立ち上がる物が見られる。

擂鉢は、10数個体あるものと思われる。珠洲系、在地の瓦器に近い物、土師質の物があるが、珠洲系と思われる物が多い。珠洲系については、大畠期に属する物が多い。

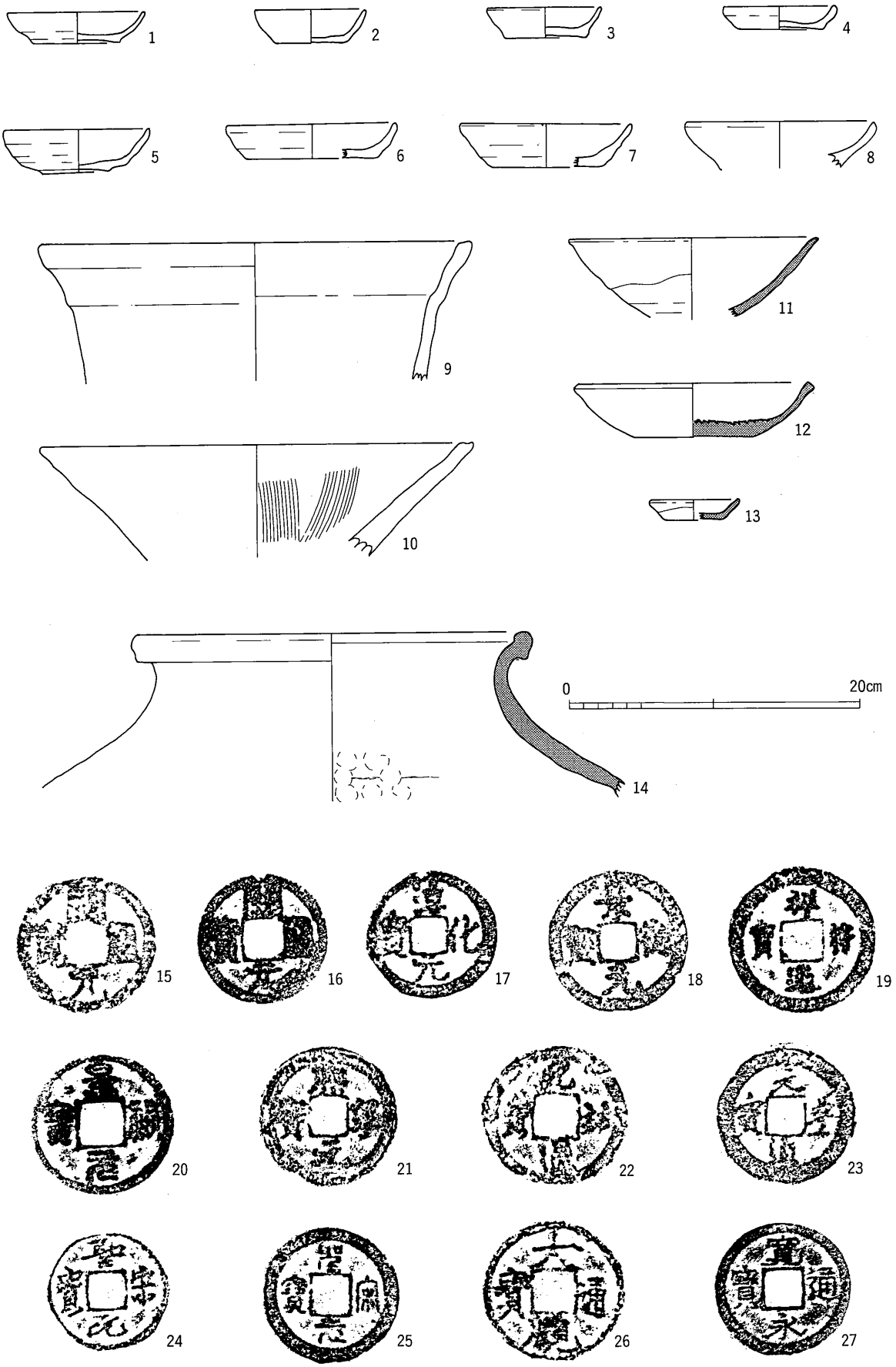
碗には、龍泉窯系の青磁、古瀬戸の灰釉（11）と天目の破片がある。いずれも数点の出土であり、青磁は13世紀、古瀬戸は14～15世紀が与えられる。

壺と皿は、各1点が出土している。壺は常滑で、口縁部は端部が丸まるものの、受け口状を呈しており、肩の屈曲が強いことから、13～14世紀と考えられる。皿は古瀬戸の御皿で、口縁端部は面取りされており、底部は糸切痕をそのまま残しており、14世紀と考えられる。

金属器は100点程が出土しているが多くは破片である。腐食が進んでおり原型を知ることができるものはほとんどないが、断面形が四角形や円形になるもの、刀子状になるものが含まれていることから、多くの器種が含まれているものと思われる。

貨幣は44点以上が出土しており、内28点は土坑からの出土である。検出面から出土した寛永通宝2枚を除けばすべて渡来銭である。

石器には砥石と凹石がある。



第33図　土坑・グリッド出土遺物

第4章　ま　と　め

都市計画道路粟佐橋線の発掘調査の際、古墳時代の住居跡が検出されているため、集落跡の存在を想定して調査を開始したが、検出されたのは平安時代の住居跡2棟と中世の土坑群であった。

検出された土坑は形状、規模から5群3類に分類できる。

A群　長さ2.5m以上、幅1.5m以上　　Ⅰ類　方形

B群　長さ1.8m以上2.5m未満、幅1m以上　　Ⅱ類　円形

C群　長さ1.8m未満1.4m以上、幅0.7m以上　　Ⅲ類　不整形

D群　長さ1.4m未満、幅0.6m以上

E群　長さ1.4m未満、幅0.6m未満

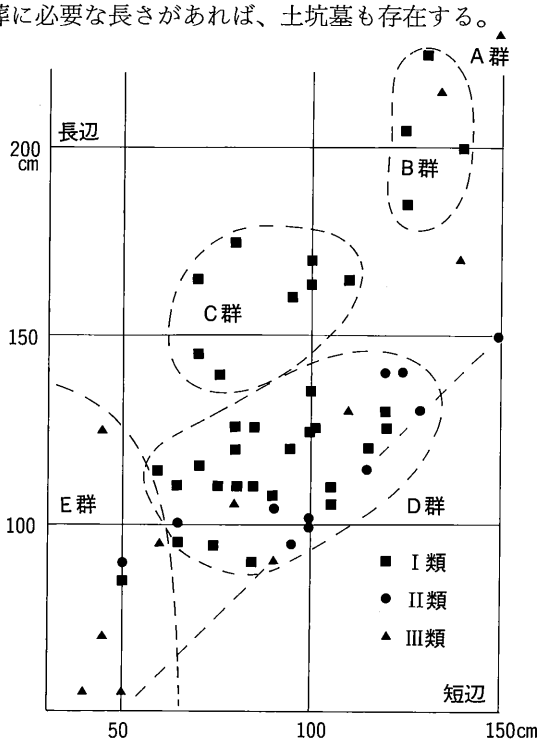
A群とした46号土坑は土坑とするよりむしろ竪穴として扱うべき遺構であろう。5基が含まれるB群はすべてⅠ類で、63号土坑を除き釘あるいは古銭を伴っており、土坑墓と考えられる。規模、釘の出土が多い点から伸展葬の木棺を埋葬したものであろう。C群は9基が含まれており49号土坑を除きⅠ類となる。49号土坑を除き掘り込みも垂直に近く、幅0.9mを超える4基は釘と思われる鉄製品が含まれている。49号土坑は掘り込みも浅く集石を持つため別の機能が考えられるが、他は土坑墓である可能性が高い。

検出された土坑の半数以上はD群に含まれる。最も多いのはⅠ類であり21基が含まれる。この内6基から古銭あるいは釘が出土している。12基あるⅡ・Ⅲ類でも3基から出土しているが、掘り込みが擂鉢状で、平坦な底部を持たないものが多く、近世陶器を出土した土坑も含まれている。想像の域を出ないが、D群の内Ⅰ類の多くは土坑墓であり、Ⅱ・Ⅲ類は土坑墓以外のものが多いと考えられる。

E群は多くが不定形で長さや幅も狭いため、土坑墓以外の性格が考えられるが、人骨を出土した11号土坑は長さは不明であるが幅は35cmしかなく、屈葬に必要な長さがあれば、土坑墓も存在する。

そのほか注目されているものに28号土坑がある。不整方形で東西に突出部があり、埋土に焼骨粒を持つ遺構であるが、同様の遺構が塩尻市の吉田川西遺跡でも数基が検出されている。形状もまったく同じで、焼けた人骨を持つが一体分はなく、炭化物、焼土が検出されているが底部は焼けていない。火葬との関連が指摘されているが、その性格については不明である。

いずれにしても、数十基の墓がこの地に存在したこととなる。調査地の西側には永代寺があるが、創建は寛文12年（1672）と伝えられており、出土遺物から15世紀前半を中心とした時期が与えられる土坑墓群との関係は考えられない。今後周辺の中世の遺跡と合わせてその性格を考えて行く必要がある。



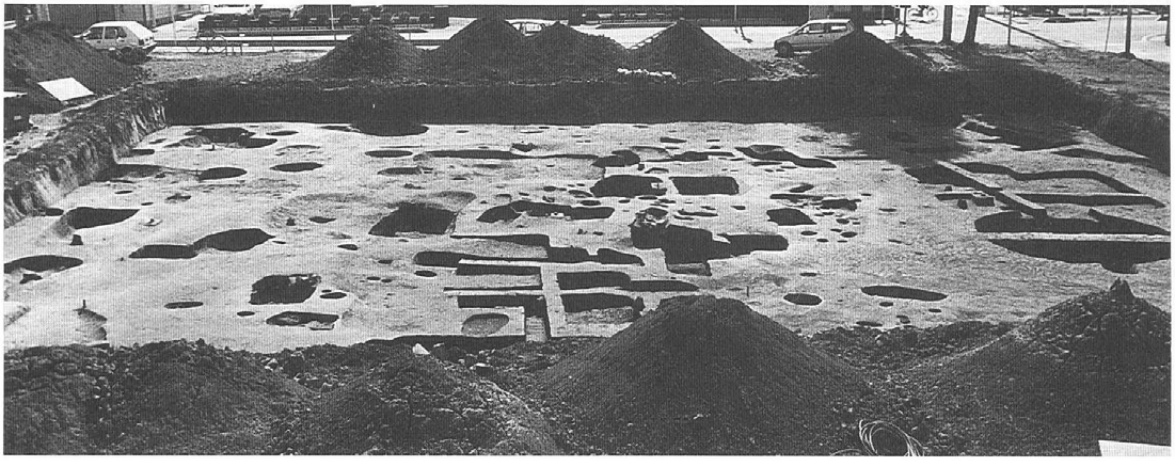
第34図　土坑の平面形態

中世土坑一覧表　1

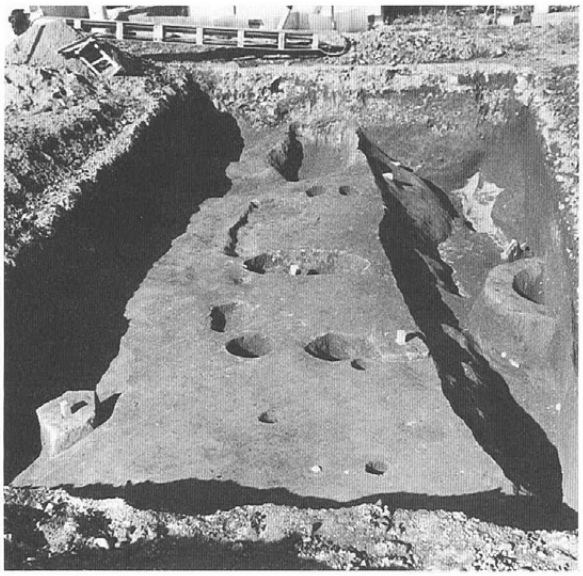
土壙墓No.	位置	平面形	規模	類型	深さ(cm)	長軸方向	出土遺物・備考
1	F－10	方形	120×115cm	D I	48	N－80°－E	
2	G－11	隅丸方形	130×120cm	D I	30	N－80°－W	
3	B－10	円形	直径90cm	D II	28		開元通宝1・釘2本
4	C－11	方形？	70×？cm		15	不明	祥符通宝1
5	D－9	不整円形	140×125cm	D II	23	N－45°－E	土器皿
6	C－9	長方形	115×70cm	D I	39	N－70°－E	砥石
7	A－9	不整形			70		軽石皿
8	B－10	隅丸方形	(150)×115cm		40	N－85°－W	石臼
9	C－10	不明円形	140×120cm	D II	12	N－20°－W	
10	D－10	円形	直径115cm	D II	35		内耳鍋
11	B－11	隅丸方形	(80)×35cm		31	N－20°－W	聖宗元宝1・人骨（頭骨）
12	E－6	方形	200×140cm	B I	75	N－15°－W	珠洲擂鉢・不明古銭4・釘3・馬歯
13	E－5	長方形	165×110cm	C I	25	N－20°－W	釘
14	F－6	長方形	125×80cm	D I	78	N－25°－W	土器皿
15	F－7	不整長方形	(160)×70cm		7	N－15°－W	土器皿・釘・砥石2・凹石
16	欠						
17	F－6	長方形	135×100cm	D I	33	N－15°－W	不明古銭
18	E－7	長方形	185×125cm 180×115cm	B I B I	72 72	N－15°－W N－25°－W	土器皿・元祐通宝1・不明古銭1
19	E－10	楕円形	90×50cm	E II	10	N－20°－W	
20	B－11	円形	直径100cm	D II	15		
21	A－11	長方形	120×80cm	D I	31	N－75°－E	人骨？
22	H－6	隅丸方形	145×70cm	C I	29	N－85°－W	
23	E－8	長方形	120×95cm	D I	36	N－20°－W	珠洲擂鉢・開元通宝
24	E－8	長方形	125×85cm	D I	31	N－15°－W	
25	C－5	円形	直径100cm	D II	24		
26	D－5	長方形	125×100cm	D I	35	N－20°－W	釘
27	C－5	長方形	225×130cm	B I	79	N－25°－W	釘2
28	H－8	不整長方形	110×65cm	D I	8	N－25°－W	焼土・炭化物・焼骨片、東西の突出部
29	E－5	方形	105×105cm	D I	23		在地擂鉢
30	E－11	方形	120×(120)cm		42		土器皿・釘2・軽石凹石
31	D－10	円形	直径130cm	D II	25		釘2
32	F－7	長方形	170×100cm	C I	71	N－70°－E	釘1
33	G－9	長方形	160×95cm	C I	42	N－20°－W	不明古銭1・鉄　覆土に焼土含む
34	C－4	長方形	140×75cm	C I	51	N－65°－E	
35	G－7	長方形	110×80cm	D I	28	N－20°－W	
36	G－6	長方形	(180)×85cm		57	N－90°－E	土器皿・釘1・凹石
37	C－6	方形	110×85cm	D I	27	N－20°－W	不明古銭1・釘1・青銅器片1
38	H－7	楕円形	105×90cm	D II	23	N－40°－E	土器皿、青磁碗1
39	C－3	長方形	95×50cm	E I	13	N－80°－E	
40	E－2	長方形	110×75cm	D I	18	N－70°－E	
41	G－3	長方形	175×85cm	C I	30	N－25°－W	

中世土坑一覧表　2

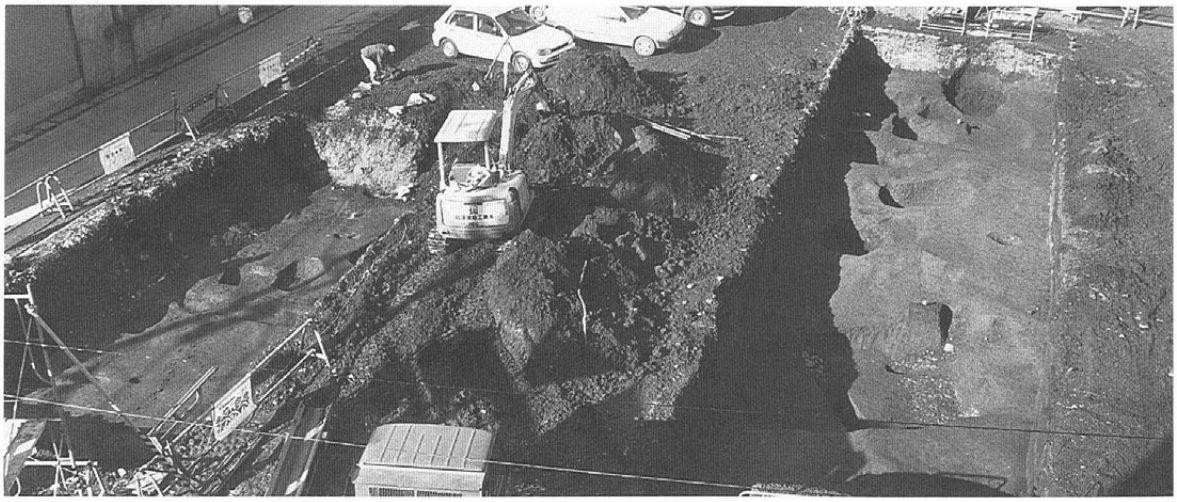
土壙墓No.	位置	平面形	規模	類型	深さ(cm)	長軸方向	出土遺物・備考
42	E－2	長方形？	170cm×		35	N－30°－W	
43	G－2	方形	125×120cm	DⅠ	43		古瀬戸天目茶碗1
44	C－7	円形？	直径150cm		42		内耳鍋1
45	G－7	長方形	115×60cm	DⅠ	33	N－20°－W	不明古銭1・釘1
46	D－4	不整形	290×150cm	AⅢ	65	N－80°－E	古瀬戸天目茶碗1・青磁碗1・景徳元宝1・釘3
47	H－2	長方形	125cm×		26	N－75°－E	白磁碗破片1
48	浄化槽	方形？	不明		31		土器皿・釘1石囲
49	H－8	不整形	140×75cm	CⅢ	18	N－5°－W	古瀬戸
50	浄化槽	楕円形	125×45cm	EⅡ	20	N－80°－W	
51	G－8	長方形	105×90cm	DⅠ	40	N－20°－W	土器皿・内耳鍋・大観通宝1・釘2・砥石
52	浄化槽	不明	不明		18		土器皿・内耳鍋・釘1・不明鉄器1
53	欠						
54	浄化槽	円形？	直径95cm	DⅡ	25		
55	I－2	方形？			37		
56	I－6	長方形	(110)×65cm		24	N	
58	車庫A	不明			22		
59	〃	方形	90×85cm	DⅠ	19	E	
60	〃	楕円形	100×65cm	DⅡ	42	N－20°－E	
61	〃	方形	110×105cm	DⅠ	13	N	
62	〃	不整方形	170×140cm		24	N－5°－E	
63	〃	不整長方形	165×135cm	BⅢ	21	N－5°－W	
64	〃	長方形	95×65cm	DⅠ	23	N－5°－E	
65	〃	方形？	220cm×		38	N－10°－E	珠洲擂鉢・釘1
66	〃	不整長方形	115×80cm	DⅠ	23	N－10°－E	釘1
67	〃	長方形	95×75cm	DⅠ	21	N－75°－E	
68	〃	楕円形	95×60cm	EⅡ	19	N－10°－W	
69	〃	方形？	130cm×		62	N－5°－E	瓦質擂鉢・土器皿・釘4・宣和通宝（篆）1
70	〃	長方形	55×40cm	EⅠ	12	N－5°－W	
71	〃	不整方形	130×110cm	DⅠ	16	N－15°－W	
72	〃	不明	不明		13		
73	車庫B	隅丸方形	55×50cm	EⅠ	65	N－10°－E	常滑甕・凹石
74	〃	不整長方形	165×100cm	CⅠ	78	E	不明古銭1・不明鉄器1
75	〃	長方形？	(220)×180cm		61	N－85°－W	淳化元宝（真）1・熙寧元宝1・淳寧元宝1・不明古銭5・不明鉄器
76	〃	方形？	不明		31		珠洲擂鉢・釘1
77	〃	楕円形	70×45cm	CⅡ	15	N－60°－W	不明鉄器
78	〃	長方形	210×125cm	BⅠ	27	N－85°－E	常滑甕・不明古銭1
79	欠						
80	車庫B	長方形？	(165)×95cm		35	E	不明鉄器
81	〃	不整方形	160×70cm	CⅠ	61	N－5°－E	
82	〃	不明	不明		49		
83	詰所棟	方形	120×80cm	DⅠ	25	N－80°－E	



庁舎部分全景



左：浄化槽部分全景
右：車庫Ａ棟全景

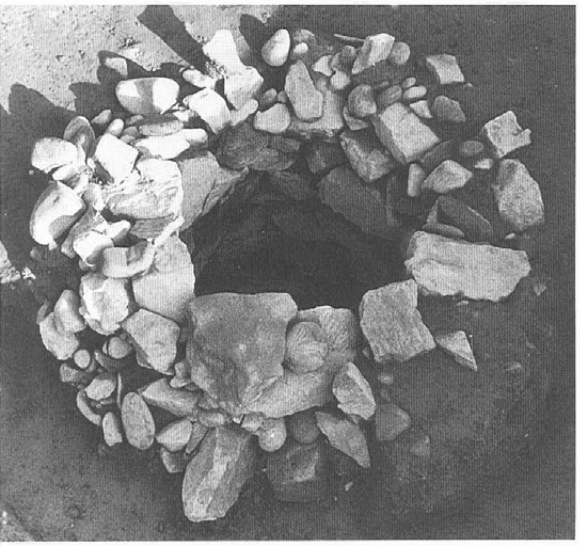


車庫Ｂ棟全景

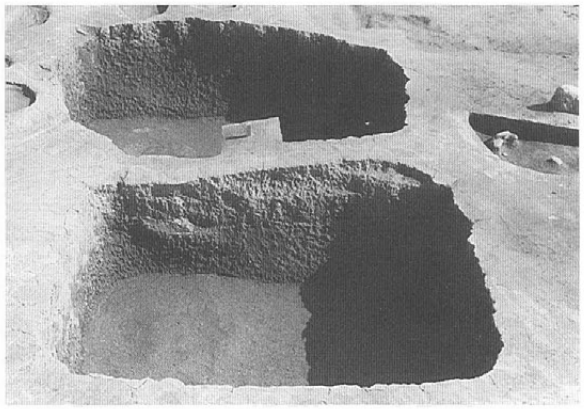
大型車庫棟部分全景

図版 5

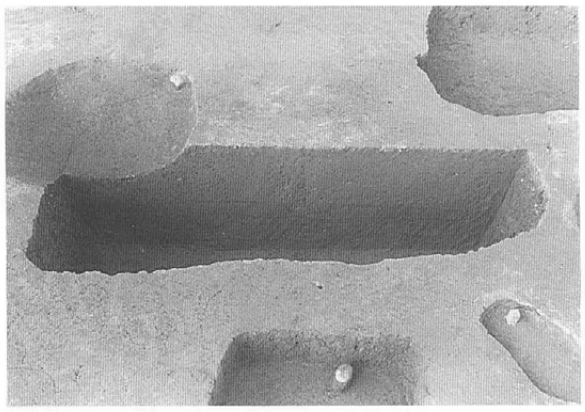
1号住居跡



左：1号井戸跡
右：2号井戸跡

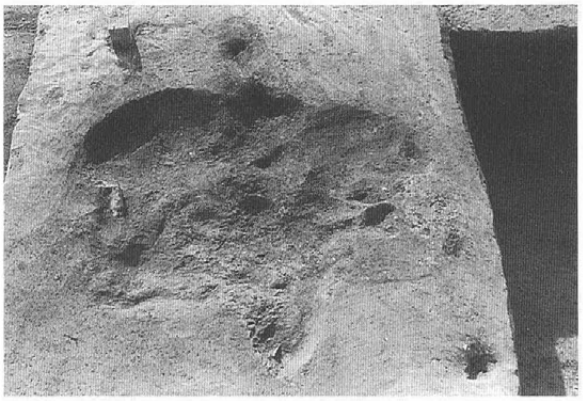


左：11・21号土坑
右：12・18号土坑

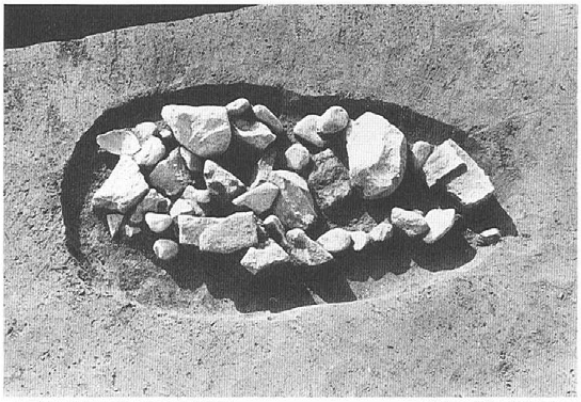


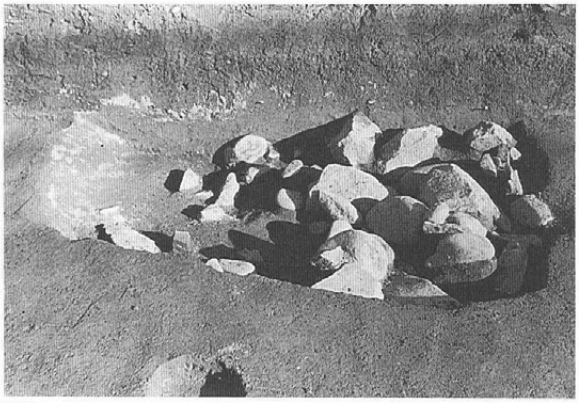
左：15号土坑
右：25・27号土坑

左：28号土坑
右：48号土坑

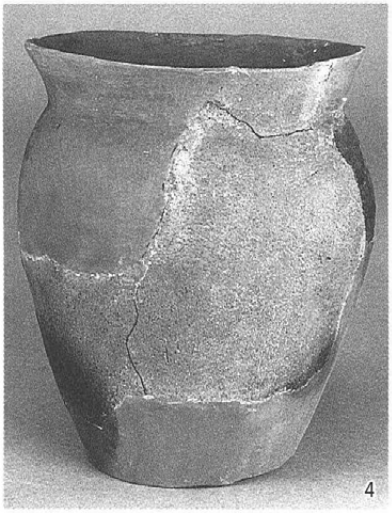


左：48号土坑
右：65号土坑



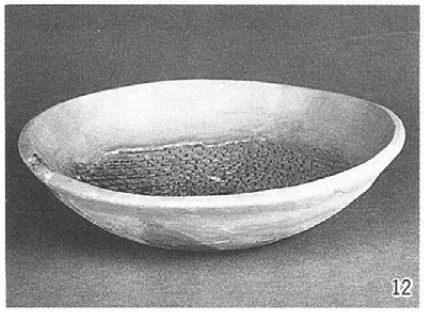


1号住居跡出土遺物



2号井戸跡出土遺物

土坑・グリッド出土遺物



報告書抄録

ふりがな	あらいいせき3　みやうらいせき
書名	荒井遺跡Ⅲ　宮裏遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	佐藤信之
編集機関	更埴市教育委員会
所在地	〒387　長野県更埴市杭瀬下84　TEL026-273-1111
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
荒井(あらい)	長野県(ながのけん) 更埴市(こうしょくし) 大字屋代(やしろ)	262169　31－5			19950511 ～ 19950603	200	アメニティータウン屋代団地建設に伴う発掘調査
宮裏(みやうら)	長野県(ながのけん) 更埴市(こうしょくし) 大字屋代(やしろ)	262169　28－13			19941001 ～ 19941109 19950912 ～ 19951222	1,100	更埴建設事務所建設に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒井	集落跡 墓	古墳時代 奈良・平安	方形周溝墓　1基 土器棺　2基 住居跡　7棟 溝　8基	土師器、須恵器、勾玉	
宮裏	集落跡 墓	平安時代 中世	住居跡　2棟 竪穴状遺溝　5基 井戸　2基 土坑　80棟	土師器、須恵器、中世陶器	中世墳墓群

荒井遺跡Ⅲ　宮裏遺跡

発行日　平成7年3月31日
発行　更埴市教育委員会
〒387　長野県更埴市杭瀬下84番地
電話　(0262) 73－1111
印刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381　長野県長野市西和田470
電話　(0262) 43－2105